

日本オリエント学会第 62 回大会 研究発表会 要旨集

2020 年 12 月 6 日 (日)

オンライン開催 (名古屋大学)

第 1 部会

| | 時間 | 発表者 | タイトル |
|------|-------------|--|---|
| 1 | 10:00~10:25 | 小高敬寛、前田修、下釜和也、早川裕弼、西秋良宏、ナシルワン・A・ムハンマド、カマル・ラシード | イラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の後期新石器時代層 |
| 2 | 10:30~10:55 | 三木健裕 | 紀元前 5 千年紀、ザグロス山脈南麓における彩文土器の拡散・展開を再考する—バウンダリーオブジェクトとしての彩文土器— |
| 3 | 11:05~11:30 | 山口雄治、紺谷亮一、フィクリ・クラックオウル | キュルテペ遺跡における前期青銅器時代の土偶と石偶 |
| 4 | 11:35~12:00 | 鈴木慎也 | 古代スリランカの水利施設の形状比較 |
| 昼食休憩 | | | |
| 5 | 13:00~13:25 | 津村眞輝子 | 境界域におけるサーサーン朝ペルシアの貨幣—クルディスタンからの出土例をもとに— |
| 6 | 13:30~13:55 | 青木健 | イランの仏教—ペルシア湾岸の石窟寺院— |
| 7 | 14:05~14:30 | 内記理 | ガンダーラ地方の仏教寺院における塔院と彫刻材質比率の関係 |
| 8 | 14:35~15:00 | 下山繁昭 | 高句麗文化の担い手が来た道—三本足の鳥につながる聖なる数字— |

第2部会

| | 時間 | 発表者 | タイトル |
|------|-------------|--------------|--|
| 1 | 10:00~10:25 | アブデルアール・アハメド | 古代エジプト・中王国時代（第11・12王朝）のネクロポリス・テーベ |
| 2 | 10:30~10:55 | 高橋寿光 | 土器からみた古代エジプト新王国時代の埋葬 |
| 3 | 11:05~11:30 | 肥後時尚 | 古代エジプトの「死者の書」における m'ty |
| 4 | 11:35~12:00 | 藤井信之 | 前4世紀エジプトの軍事勢力をめぐる問題について |
| 昼食休憩 | | | |
| 5 | 13:00~13:25 | 坂本翼 | カラノグ遺跡の階層性 |
| 6 | 13:30~13:55 | 間舎裕生 | 中期青銅器時代・後期青銅器時代南レヴァントの都市における市門の位置づけ—市門の形態と機能の分析を通して— |
| 7 | 14:05~14:30 | 藤澤綾乃 | 初期ビザンツ期パレスチナの教会堂構造—アプスと小礼拝堂の関わりについて— |
| 8 | 14:35~15:00 | 田辺理 | 東京国立博物館所蔵杯をもつヘラクレス像について |

第3部会

| | 時間 | 発表者 | タイトル |
|------|-------------|-----------|--|
| 1 | 10:00~10:25 | 川上直彦 | GISによるアッカド王朝の中心都市「アガデ」の所在地探査—ティグリス川の古代流路との関連性による—考察— |
| 2 | 10:30~10:55 | 菊地咲 | メソポタミアにおける暦注の注釈書の欠如に関する考察 |
| 3 | 11:05~11:30 | 江原聡子 | ドゥムジからタンムーズへ—泣哭儀礼の様相— |
| 4 | 11:35~12:00 | 西山伸一、渡部展也 | 新アッシリア帝国の拠点都市の周辺景観—ヤシン・テペ考古学プロジェクトからの考察— |
| 昼食休憩 | | | |
| 5 | 13:00~13:25 | 柴田大輔 | ブロークン・オベリスクの王—アッシュル・ベール・カラカ、ティグラトピレセル—世か— |
| 6 | 13:30~13:55 | 山田重郎 | 被征服民のアッシリア帝国への帰属をめぐる—考察 |
| 7 | 14:05~14:30 | 渡井葉子 | 紀元前1千年紀バビロニアの都市民の家族における女性の役割 |
| 8 | 14:35~15:00 | 山本孟 | ヒッタイトの祭儀における神々に近づく際の所作についての—考察 |

第4部会

| | 時間 | 発表者 | タイトル |
|------|-------------|--------|---|
| 1 | 10:00~10:25 | 高橋洋成 | 聖書ヘブライ語の不規則変化名詞に見られるセゴル型の痕跡—名詞の語幹交替を踏まえた新しい分類方法の提案— |
| 2 | 10:30~10:55 | 新井雅貴 | ヘブライ語聖書における「レファイム（死者）」と死者儀礼 |
| 3 | 11:05~11:30 | 榮谷温子 | アラビア語の名詞文の主語の限定性と特定性 |
| 4 | 11:35~12:00 | 竹田敏之 | 現代アラビア語の標準化とクルアーン読誦学における流派間競争—ハフス流派の優勢化について— |
| 昼食休憩 | | | |
| 5 | 13:00~13:25 | 五十嵐小優粒 | ペルシア語における動詞の過去分詞と同形の形容詞は本当に形容詞か |
| 6 | 13:30~13:55 | 宮川創 | コプト語の母音音素目録の再整理—コイナー・ギリシア語およびアラビア語との言語接触と古代エジプト語史の観点から— |
| 7 | 14:05~14:30 | 村上武則 | クルド語クルマンジー方言の無接続詞文 |

第5部会

| | 時間 | 発表者 | タイトル |
|------|-------------|-------|---|
| 1 | 10:00~10:25 | 相樂悠太 | イブン・アラビーの信仰論と「神の変容」のハディース |
| 2 | 10:30~10:55 | 平野貴大 | 十二イマーム派による初期のキリスト教史理解—同派伝承中のペトロ・パウロ観をもとに— |
| 3 | 11:05~11:30 | 角田哲朗 | フルーフイー教団における所謂「神の時代」について |
| 4 | 11:35~12:00 | 三代川寛子 | 20世紀半ばのコプト正教会における聖メナス崇敬の復興 |
| 昼食休憩 | | | |
| 5 | 13:00~13:25 | 永井悠斗 | アル・ビールーニーの伝えるインドの太陽崇拝 |
| 6 | 13:30~13:55 | 宮島舜 | スフラワルディー哲学における強度について |
| 7 | 14:05~14:30 | 南澤武蔵 | オリエント文明の高校世界史における今後について—次期学習指導要領とその変化— |

第6部会

| | 時間 | 発表者 | タイトル |
|------|-------------|------------|--|
| 1 | 10:00~10:25 | 近藤信彰 | 近世イランにおける講釈とその周辺—『ハムザ物語』を中心に— |
| 2 | 10:30~10:55 | 鈴木均 | イラン近代史の叙述における時代区分の問題 |
| 3 | 11:05~11:30 | 徳永佳晃 | レザー・シャー成立期のイランにおける選挙制度改革と国民国家理念—1304/1925年選挙法改正— |
| 4 | 11:35~12:00 | 矢本彩 | 20世紀初頭オスマン帝国における「3月31日事件」発生の一要因としての徴兵問題 |
| 昼食休憩 | | | |
| 5 | 13:00~13:25 | ハシャン・アンマール | イスラーム的制度としてのワクフとその法学的構築—クルアーン・ハディースとイジュティハード— |
| 6 | 13:30~13:55 | 三橋咲歩 | マムルーク朝後期カイロにおける都市と災害 |
| 7 | 14:05~14:30 | 小澤一郎 | 19・20世紀転換期のアフガン人による武器交易の再検討 |
| 8 | 14:35~15:00 | 安岡義文 | マディーナット・アッ=ザフラー王宮址の柱頭のプロポジションについて |

主催 日本オリエント学会

開催 第62回大会実行委員会

名古屋大学：周藤芳幸、河江肖剰、門脇誠二、影山悦子、村田光司

中部大学：中野智章、西山伸一

イラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の後期新石器時代層

小高 敬寛（金沢大学）

前田 修（筑波大学）

下釜 和也（古代オリエント博物館）

早川 裕弐（北海道大学）

西秋 良宏（東京大学）

ナシルワン A. ムハンマド（KRG スレーマニ文化財局）

カマル ラシード（KRG スレーマニ文化財局）

イラク・クルディスタン地域に所在するシャフリゾール平原は、新石器化が先行したいわゆる「肥沃な三日月地帯」のなかに位置しながら、ディヤラ川を介して都市化の中核であったメソポタミア低地へと通じる、要衝の地である。新石器化から都市化への移行プロセスを定点的に追跡するうえでは、恰好のフィールドといえるだろう。ところが、「三日月地帯」の初期農耕牧畜民がメソポタミア低地の開発を始めた後期新石器時代、前 7 千年紀後葉から前 6 千年紀前葉までの考古学的証拠は、発掘調査による確固とした付帯情報を伴う形でみつかっておらず、そのプロセスの解明を妨げている。

そこで 2019 年、私たちはこの考古学的空白を埋めるため、シャフリゾール平原内のシャカル・テペ（Shakar Tepe）と呼ばれる遺跡の裾部に階段状トレンチを設け、発掘調査を実施した。その結果、トレンチ最上部からの地表下 5 m ほどで地山に達し、その直上に厚く堆積した後期新石器時代の文化層を検出することに成功した。

残念ながら、昨今の状況下で出土遺物の詳細な分析作業は滞っている。しかし、発掘現場での所見に基づくかぎり、土器や石器にみられる型式学的特徴は狙いとした年代幅に重なることを示唆していた。さらに、トレンチ内から採取し国内に持ち帰った多数の炭化物試料について、放射性炭素年代測定を行なったところ、前 6400～6000 年頃との結果が得られた。これにより、所期の目的に即する、考古学的空白の一部を埋める文化層であることが確かめられた。

ただし、その土器アセンブリッジや石器インダストリーには、これまでほとんど知られていなかったような、特異な型式学的特徴をみせる資料が明らかに含まれることも分かっている。出土遺物の詳細な考古学的分析によって、まずはそうした未知の物質文化の内容を把握すること、そして、周辺地域における当該年代の物質文化と比較しつつ、メソポタミア低地開発の時代におけるシャフリゾール平原の地域性を評価することが、次なる課題として残されている。

紀元前5千年紀、ザグロス山脈南麓における彩文土器の拡散・展開を再考する
—バウンダリーオブジェクトとしての彩文土器—

三木 健裕（ベルリン自由大学・日本学術振興会海外特別研究員）

鈍黄色の地に黒色の彩文が描かれ、土器焼成窯で焼成された彩文土器は、紀元前5千年紀イラン、ザグロス山脈南麓一帯にかけて広範囲に拡散し、地域毎に様々な展開を見せた。先行研究ではこの現象の背景として陶工の移動、遊牧民の移動、通婚など様々な移動が主張されてきた。本発表ではこの彩文土器の拡散・展開の実態を再検討する。この再検討にあたり発表者は、土器づくりといった実践を、共同体内における継承という観点に着目して扱う「実践共同体」という視点を導入する。そして彩文土器を、実践共同体間の境界を越えて各共同体を結びつける役割を果たす「バウンダリーオブジェクト」として捉え、背景にある人間の移動をこれまでの研究よりも柔軟に捉え直す。

発表者は対象地域としてザグロス山脈南麓にあるベフバハーンならびにズーレー平原を選択し、当該地域における彩文土器の拡散・展開を論じる。特に紀元前5千年紀中葉と推定されるテペ・ソフズ遺跡出土の彩文土器資料、紀元前5千年紀末葉のタル・チェガ・ソフラ遺跡出土の彩文土器資料を扱う。テペ・ソフズ遺跡は1970年代に発掘調査がなされ、出土した彩文土器は現在ベルリン自由大学に所蔵されている。タル・チェガ・ソフラ遺跡では、近年の墓域や「聖域」での発掘調査から、完形土器、人面やヤギが彫刻された石板が多数発見されている。ベフバハーン、ズーレー両平原は西部のスシアナ平原、東部のマルヴ・ダシュト平原という、それぞれ独自の彩文土器文化が発達した地域の中に位置している。本発表ではベフバハーン・ズーレー両平原の彩文土器の受容・展開の様相を、文様・器形・製作技術の選択、それらの継承に着目し、スシアナ平原ならびにマルヴ・ダシュト平原における様相と比較する。その上で彩文土器の拡散・展開現象の背景にある人間の移動を予察する。

分析の結果、前5千年紀中葉のテペ・ソフズ遺跡では、土器の文様といった視覚的に認識・伝達可能な属性にマルヴ・ダシュト平原との類似性が認められたものの、視覚的に認識しにくい属性には相違が見られた。視覚的に認識しやすい情報を広範な地域で緩やかに共有しながらも、土器の目立たない細かな違いは、各地域の実践共同体内で継承を繰り返す中で、独自に展開したと推察される。前5千年紀末葉のタル・チェガ・ソフラ遺跡では、スシアナ平原の影響を受けるとともに、マルヴ・ダシュト平原との類似性は文様・形態において乏しくなる。しかし一部にはマルヴ・ダシュト平原と強い類似性を見せる文様も見られる。前5千年紀末の三地域における彩文土器文化が、顕著な地域性を見せつつ展開する中においても、東から西への移動・交流が存在していたことが示唆される。

キュルテペ遺跡における前期青銅器時代の土偶と石偶

山口 雄治（岡山大学）

紺谷 亮一（ノートルダム清心女子大学）

Fikri Kulakoğlu（Ankara University）

アナトリアの土偶や石偶は、後期銅石器時代以降、それ以前とは異なって、より抽象的、画一的な人物表現へと変化する。そのためか、前期青銅器時代の土偶・石偶研究は、それ以前の時代と比べると低調であると言わざるを得ない。しかし、前期青銅器時代はアナトリア史上、最も多く土偶と石偶が確認されている時期でもある。したがって、土偶・石偶の社会的役割を明らかにすることは、アナトリアにおける前期青銅器時代社会の一つの特質を解明する大きな手がかりとなるだろう。

発表らが調査を行っているキュルテペ遺跡からは、過去に数多くの石偶が出土し、近年の北トレンチの発掘調査においても土偶やアスファルトによって修復された石偶などが複数点出土している。また、近年の調査によって、前期青銅器時代 III 期の大規模建築址の一面から多量の石偶がまとまって出土した。この発見は、石偶の保管・管理等を示唆するものとして大変興味深い。本発表では、これらの土偶と石偶の特徴を整理し、その年代的位置、変遷を確認した後に、周辺他地域との関係について明らかにする。土偶・石偶の社会的役割を考えるための基礎的研究を行いたい。

【参考文献】

- 紺谷亮一、山口雄治、下釜和也、フィクリ・クラックオウル 2019「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査 2018 年—」『第 26 回西アジア発掘調査報告会報告集』西アジア考古学会 pp.16–18.
- 紺谷亮一、山口雄治、下釜和也、フィクリ・クラックオウル 2020「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査 2019 年—」『第 27 回西アジア発掘調査報告会報告集』西アジア考古学会 pp.49–51.
- Kulakoğlu, F., Kontani, R., Uesugi, A., Yamaguchi, Y., Shimogama, K., Semmoto, M. 2020. Preliminary Report of Excavations in the northern sector of Kültepe 2015–2017. *Subartu* 45. pp.9–88.
- 山口雄治、紺谷亮一、上杉彰紀、下釜和也、千本真生、Fikri Kulakoğlu 2019 「中央アナトリアにおける前期青銅器時代土器の変遷とその年代—キュルテペ遺跡出土資料を中心に—」日本オリエント学会第 61 回大会

古代スリランカの水利施設の形状比較

鈴木 慎也（東京工業高等専門学校）

スリランカは、国土の4分の3がドライゾーンと呼ばれる乾燥地域で占められている。ドライゾーンの年間平均降雨量は約1100mmで、そのほとんどは雨季に降り、乾季の降雨量はわずか200mm前後である。そのため、天水だけでは乾季の耕作は困難であったことから、限られた水資源を有効活用するために、古代から貯水灌漑システムが高度に発達してきた。本システムは、巨大貯水池の築造を可能としたソロウワと、複数のため池を連結した灌漑ネットワークにその特徴がある。ソロウワは、堤防に埋設された石造の暗渠式取水（排水）施設であり、取水暗渠部と排水暗渠部、そしてビソーコトゥワと呼ばれる立坑部から構成される（図1）。ソロウワは巨大な貯水池から決壊の恐れなく取水することを可能とした重要な遺構である。しかし、ソロウワに関する考古学的調査・研究はほとんどなされておらず、これまでに報告されている平面図等の資料の大半は、100年以上前に刊行された著作物に掲載されたものであり（Parker 1909）、新たに追加された資料は、近年、発掘調査が行われたソロウワの平面図数点のみである。また、劣化が進んでいる遺構が多く、盗掘や貯水池の修繕工事によって半壊、全壊してしまったものも少なくない。そのため、考古学的な基礎資料の収集とソロウワ独自の編年構築は緊喫の課題である。

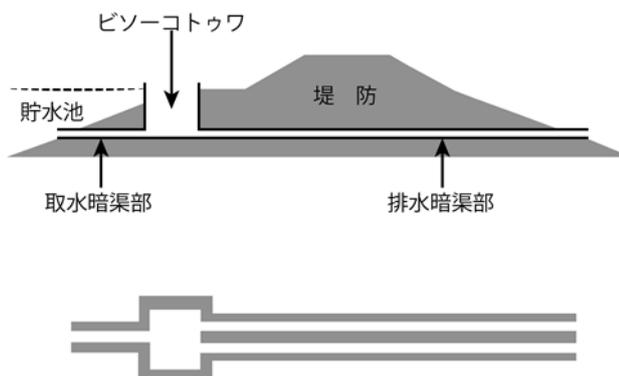


図1 ソロウワの基本構造

本発表では、アヌラーダプラ県のコラサーガラ貯水池のソロウワを対象とした現地調査によって得られた、遺構の形状と規模について、他の遺構との比較分析の結果について報告する。分析の結果、対象遺構のビソーコトゥワの形状が、パラクラマバーフ1世（在位 1153頃～86年）の治世に築造された2つのソロウワのビソーコトゥワの形状と類似することから、12世紀頃に築造された可能性が高いことが明らかとなった。また、ビソーコトゥワの底部からは、他に類例のない複数の柱穴を伴う張り出し部が確認された。これは内部に水量調節のための何らかの装置が存在していたことを示すものであり、ビソーコトゥワの機能を論じるうえで、本遺構は重要な事例である。コラサーガラ貯水池は他のソロウワを伴う貯水池と比べ、極端に規模が小さいことから、限られた水資源を効率的に活用するために、何らかの水量調節装置を設ける必要性が高かったと推察される。

境界域におけるサーサーン朝ペルシアの貨幣
—クルディスタンからの出土例をもとに—

津村 眞輝子（古代オリエント博物館）

3～7世紀に西アジアの広大な地域を支配したサーサーン朝ペルシアが発行した銀貨はユーラシア大陸にまたがる東西交流の中で活用されていたと推定され、領域を超えてヨーロッパから中央アジア、中国西域、東南アジアに至る迄広く出土する。

発表者はかつて本学会において、サーサーン朝ペルシアの銀貨がどのように周辺諸国に影響を与えたのかを、主に中国からの出土例をもとに検証した。そこでは、サーサーン朝領域の東側（アフガニスタン～中国）およびサーサーン朝末期から初期イスラーム時代にかけて、サーサーン朝銀貨そのものが長く利用されたり、模倣されたりすることで、地域および時代を超えて活用されていたことを示した。これによって、当時サーサーン朝ペルシア貨幣が、銀貨として信用度が高かったことが示唆された。

本研究では、サーサーン領域の東側だけでなく、西側地域における状況もみていく。また衰退期ではなく、王朝成立期をも視野に入れる。

特にホード（一括出土品）に注目する。サーサーン式銀貨（サーサーン朝ペルシア発行の銀貨およびイスラーム初期に模倣して発行されたアラブ・サーサーン式銀貨）については、正式な発掘を経ずに骨董市場に流れるものも多いが、一括で出土する例が多い。東側での出土例だけでなく、サーサーン朝領域の西側、ローマ世界との接点にも目を向けて、いくつかの事例をたどりながら、境界域における貨幣の使われ方を再検証する。

イランの仏教—ペルシア湾岸の石窟寺院—

青木 健（静岡文化芸術大学）

紀元前後の頃、インド亜大陸に発した仏教がカイバル峠を越えてイラン高原東部に西流した事実は、バクトリアに点在する遺跡から見て、もとより疑いようがない。しかし、仏教伝播の流れは此处から急角度で東流し、パミール高原を越えてタリム盆地へと向かい、遂にイラン高原を西へは向かわなかったとされる。無論、仏教西漸の限界をバルフ＝カンダハールを結ぶフーシェ・ラインに求めるフーシェの仮説は既に有効性を失っているが、現在知られている仏教遺跡の西端はマルギアナのギャウル・カラに過ぎない。21世紀に入ってから、ムルガブ川流域のペンジデフやヒンドゥークシュ山脈中のケリーガーンで仏教遺跡が発見されたとの報告があるものの、いずれもイラン高原西部には及んでいない。

だが、この当時のシルクロードは、中国と地中海世界を結ぶユーラシア大陸の主要幹線であって、インド亜大陸と中国だけを結んでいた訳ではない。それを考えると、仏教がイラン高原東部から西進しなかったのは不思議である。通常、この理由は、「イラン高原では、国家宗教として強力な組織力を持つゾロアスター教が仏教の行く手を阻んだ」と説明される。しかし、現在のところ、アルシャク朝時代（前247年～224年）のゾロアスター教が国家宗教だったとの証拠は見出されておらず、サーサーン朝時代（224年～651年）のゾロアスター教にしても、9世紀のゾロアスター教中世ペルシア語文献にはその旨の記述があるだけで、後代の願望を投影した可能性を排除できない。即ち、仏教西漸を阻止するような組織力は、当時のゾロアスター教神官団には乏しかったと考えられている。

この状況を逆に言えば、仏教がイラン高原上を西進していなかったとの前提に疑義が生じる。例えば、マニ教の教祖マーニー（216年～277年）は、開教の初期段階で、メソポタミア平原やイラン高原西部に居ながらにして、意識的に仏教を取り込もうと努力している。また、3世紀のキルデアールによるカァベ・イェ・ザルドシュト碑文には、ゾロアスター教が駆逐すべき対象として「シュラマナ＝沙門」の名称が挙げられている。これらを考え合わせると、少なくとも3世紀以降のイラン高原西部には、ある程度仏教が西進していたとの前提から出発する余地がある。本発表では、イラン高原のイスラーム化が完了する10世紀以前に、イラン高原上に仏教の痕跡と考えられる証拠がないかを探りたい。

ガンダーラ地方の仏教寺院における塔院と彫刻材質比率の関係

内記 理（京都大学大学院文学研究科）

ガンダーラ彫刻の編年が困難な理由の1つは、寺院の創建時期と出土する彫刻の制作時期が必ずしも一致しないことである。仏塔や祠堂を飾るための彫刻が、寺院の創建時だけでなく、活動期間のいつでも制作されうるためである。さらに彫刻の編年研究を困難にするのは、西北インドの仏教寺院において彫刻の大部分が寺院の最終段階の遺構に伴って出土することである。これらの要因から、どの彫刻が寺院のどの段階でつくられたものであるかについての判断は難しい。

そのような状況の中で、**Ranigat** 寺院址の発掘調査で出土土器が細かに分析され、また他の寺院址から出土した土器との比較検討がなされたことにより、各寺院の活動期間が示された意義は大きい。寺院の活動期間は、その寺院から出土した彫刻が制作されることのできる可能な時間幅を示すためである。活動期間の異なる寺院址から出土した彫刻を比較すれば、彫刻の新古の様相を把握できる可能性がある。しかしながら、土器編年によって活動期間のわかった寺院はそれぞれ300年～500年と長期間に渡って活動しており、これらの遺跡から出土した彫刻を比較するだけでは彫刻の制作時期の違いを細かに分析することは難しい。

それぞれの寺院に長い活動期間があるのであれば、やはり寺院間だけでなく寺院の内部においても彫刻を分析する必要がある。寺院内部で彫刻の新古を検討する際に一つの手掛かりとなるのは、寺院の多くが複数の塔院から構成される点である。**Ranigat** 寺院址や **Thareli** 寺院址においては主塔院とは別に、副次的な位置づけの塔院が見つかった。**Ranigat** では各塔院の遺構の検出状況等が細かに分析され、塔院の造営時期に前後関係があることが示されたが、**Thareli** では塔院の造営順が明らかになっていない。彫刻の編年研究を進めるためには、**Thareli** における塔院の造営順も整理しておきたいところである。

そこで本発表では、ガンダーラ地方の寺院の塔院間の造営順を知るための指標として、彫刻の材質の比率を取り上げる。彫刻材質の比率は、これまでの研究でも寺院間の活動時期の違いを説明するのにしばしば着目されてきた。寺院間でのみおこなわれてきた材質比率の分析を、ここでは寺院内部の塔院間でおこなう。塔院間での材質の比率の違いが造営時期の違いを反映するかどうかは、すでに塔院の造営順が判明している **Ranigat** で確認することが可能である。その上で、**Thareli** において塔院間で彫刻材質の比率にどのような違いが見られるかを確認する。

高句麗文化の担い手が来た道—三本足の鳥につながる聖なる数字—

下山 繁昭（さいたま市教育委員会文化財保護課）

オリエントとつながる三本足の鳥の紋章を持つ高句麗文化をもたらした人々は朝鮮半島北東部から日本列島に直接来たと推定される。本源地は、慈江道楚山郡蓮舞里(りょんむり)2号、時中郡(しじゅんぐん)の豊清里(ぶんちょんり)1号墳、魯南里南坡洞(なむぼどん)33号墳がある所。墓の形式は四隅突出積石墓である。紀元前1世紀頃である。また、この地域は豊富な鉄鉱石の産地であつた。推定根拠は、同じ形式の墳丘墓が日本海側にある。四隅突出型墳丘墓という弥生時代後期の墳墓である。これは、出雲と高志（北陸地方）にだけ存在。しかし、出雲と高志の墳丘墓には、違いがある。出雲式には貼石があり、高志式には貼石がない。本源地の人々は、出雲や高志に移動した。その原因は、高句麗の南下である。それにより、まだ高句麗に統一されていない部族すなわち濊(わい)、東沃阻(よくそ)、等の一部の部族が四隅突出積石墓と製鉄技術を持ち、二つの地区に移り住んだ。遺跡例に、島根県出雲市大津町の西谷墳墓群と福井県小羽町の小羽山30号墓がある。この二つの地区を通過して後に高句麗の三角隅持ち送り式天井と呼ばれる古墳が日本海側に広がって行った。遺跡例として、①兵庫県美方郡香美町村岡区福岡にある八幡山古墳5号墳、時期は5～6世紀、②丹波市春日町、坂古墳1号、2号前方後円墳、時期は6世紀～未定。③丹波市春日町山田の山田大山6号墳。時期は6世紀中頃。④丹波市春日町多利2872、二間塚古墳、前方後円墳、時期は5世紀後半～6世紀初頭。⑤石川県七尾市能登島町須曾町、須曾蝦夷穴古墳7世紀中葉前後。これらの三角隅持ち送り式天井の源流はパルティア王国時代の都城址のニサに見られる。ここの宮殿の天井に用いられている。紀元前3～2世紀である。また、ブルガリアのトラキア時代、紀元前2世紀の墳墓の石室で使われた。この様式はパルティアからブルガリアに渡り、草原の道を通じて遙か日本にまで伝播した。三角隅持ち送り式天井を持つ古墳が兵庫県に多いが、評の制度を最初に導入したのが兵庫である。最初は軍事拠点として出発した。評の字を用いた地方組織があつたのは高句麗だけである。高句麗文化の下地が出来ていたから導入出来た。三本足の鳥の紋章と三角隅持ち送り式天井と三にこだわるのは三を聖なる数字と捉えていたからである。後に古墳に鋸歯紋の三角縁神獣鏡を棺の回りに配地することも同じ考えである。古墳の隅、鏡の隅を三角で癩邪から守る。古墳の葺石も同じ思想である。日本の国造りの神社の始まりである三輪神社、そこに三鳥居がある。出雲大社のうず、三本柱。三巴の紋章。天照神話の三人兄弟の話。三種の神器も三である。邪馬台(壱)国も三字で表現。日本の龍も爪は三本である。孝明天皇の御礼服に三本足の鳥と三本の爪の龍が使われた。文化をもたらした人と道と天の思想が伝わった。

古代エジプト・中王国時代（第11・12王朝）のネクロポリス・テーベ

アブデルアール・アハメド（早稲田大学大学院博士後期課程）

現在のエジプト・アラブ共和国、ルクソール市の対岸（西岸）地域は、新王国時代（第18～20王朝）を中心とする墓域が形成されたネクロポリス・テーベと呼ばれた地域である。本発表では、新王国時代以前のとりわけ、第11・12王朝時代のネクロポリス・テーベの様相に関して発表をおこなう。第11王朝のメンチュヘテプ2世（在位：前2046～前1995年頃）により、前2025年頃に敵対していた北のヘラクレオポリス侯（第10王朝）が打倒され、エジプトは、再統一され、中王国が樹立された。メンチュヘテプ2世以前の第11王朝の王たちであるアンテフ1世・2世・3世（在位：前2103～前2046年頃）は、ネクロポリス・テーベの北に位置するアル＝ターリフ地区にサフ墓という形式の王墓を造営している。その後、メンチュヘテプ2世は、自らの墓所をアル＝ターリフ地区からアル＝ディール・アル＝バハリ地区に移し、サフ墓とは異なる形式の王墓を造営した。メンチュヘテプ2世の王の墓所が位置するアル＝ディール・アル＝バハリ地区には、第11王朝時代の岩窟墓が分布している。また、中王国時代第12王朝初代アメンエムハト1世（在位：前1976～前1947年頃）は、王都をテーベから、北のイチ・タウイに移し、王墓、王族、高官たちの墓も、新たな王都の近くに造られた。しかしながら、北への王都の移転以降も一部の第12王朝の岩窟墓は、ネクロポリス・テーベに造営され続けた。

第11・12王朝時代のネクロポリス・テーベの岩窟墓をまとめ、岩窟墓の分布・高度・平面プラン・被葬者の称号等をまとめることで、中王国時代の岩窟墓の様相を明らかにしていく。さらに、中王国時代のネクロポリス・テーベで未完成のまま放置された岩窟墓や、中王国時代以降に再利用された岩窟墓などについても言及する。

参考文献

近藤二郎 2005 『古代エジプト新王国時代岩窟墓の編年学的研究』（研究課題番号15520483）基盤研究（C）（2）研究成果報告書

Chudzik, P. 2018

“Middle Kingdom tombs of Asasif: archaeological activities in 2017”, Polish Archaeology in the Mediterranean 27/1, 183–194.

Winlock, H.E. 1942

Excavations at Deir el Bahri, 1911–1931 New York

土器からみた古代エジプト新王国時代の埋葬

高橋 寿光（東日本国際大学）

エジプト、カイロ近郊に位置するダハシュール北遺跡には中王国時代から新王国時代の墓地があり、これまでの東日本国際大学・早稲田大学の調査によって、200を超える竪坑墓、土坑墓が発見されている。これらの墓からは、埋葬に関連する様々な遺物とともに、土器が発見されている。本発表では、ダハシュール北遺跡の第30号墓から発見された新王国時代の土器群を対象とし、これらの資料から埋葬の様子を復元してみたい。

調査研究の結果、第30号墓から発見された土器群は、類例から新王国時代のトトメス4世からアメンヘテプ3世の時代に年代づけることができた。また、土器群は、「赤色土器破壊の儀式に用いられた土器」、「再生復活の儀式に用いられた土器」、「副葬品として用いられた土器」の3つのグループに分けることができた。

「赤色土器破壊の儀式に用いられた土器」のグループには、胴部に意図的に穴が開けられた赤色の壺が含まれている。赤色土器破壊の儀式とは、その名の通り、赤色の土器を意図的に破壊する儀式であり、あの世の敵を打ち滅ぼす意味があったとされている。古代エジプトで広く知られる埋葬時の儀式であり、古王国時代のピラミッド・テキストや中王国時代のコフィン・テキストに記述が見られる他、新王国時代では、サッカラ遺跡のホルエムヘブ墓などのレリーフに儀式の様子が描かれている。

「再生復活の儀式に用いられた土器」のグループには、黒色の樹脂が入ったアンフォラがある。再生復活の儀式とは、木棺に黒色の樹脂を埋葬時にかけることにより、黒色の肌を持つオシリス神と同一視されるようになる、という儀式である。

「副葬品として用いられていた土器」のグループには、石製容器を模倣した土器や花輪の装飾が施されたアンフォラなどがある。これらの土器は、これまで主に南部のルクソール地域で知られており、北部でも同様の副葬品が用いられていたことを示す資料として重要である。

本研究により、埋葬に際して、少なくとも2つの儀式が行われていたことや来世のためなどのような土器を副葬品として納めていたのかが明らかとなった。新王国時代の埋葬については、これまで壁画や文字資料を中心に研究が行われてきた。こうしたこれまでの研究に加え、本研究では墓に残された物的証拠から、実際にどのようなことが行われていたのかを具体的に示すことができた。

古代エジプトの「死者の書」における m³ty

肥後 時尚（日本学術振興会）

古代エジプトのマアト女神は、「宇宙の秩序」や「正義」、「真実」の意味をもつ抽象概念マアト（m³t）の神格化である。この女神は通常、頭にダチョウの羽根を載せた一柱の女性の姿で描写される。その一方で、「死者の書」をはじめとする一部の史資料のなかで、この女神は「二柱のマアト」（m³ty）と呼ばれる二柱の女神として現れる。本来一柱である女神が二柱の女神に変化する事例は、古代エジプトの宗教においても稀であり、研究者によって変化の理由や個々の女神の役割に関する多様な解釈が示される一方で、依然としてその最終的な結論に至っていない。

このような研究状況から、発表者はこれまでの研究において、「二柱のマアト」との関連を示すマアトの語の双数形 m³ty に注目し、古王国時代、中王国時代の史料の記述の分析を通して、その意味を明らかにしてきた。その結果、「二柱のマアト」を意味する m³ty の語の意味が時代の変遷に伴い変化していたことが明らかとなった。

本発表では、次なる研究段階であるエジプト新王国時代以降の m³ty の解明を見据え、古代エジプトの「死者の書」に注目する。「死者の書」は、現存する史料のなかで最も明確な m³ty の描写をもつことから、m³ty をめぐる先行研究の多くが「死者の書」上の m³ty の図像・記述にふれている。しかし、1000年以上にわたって利用され、膨大な出土数を誇る「死者の書」の写本に描写された第125章の図像・内容には数多くのバリエーションが存在し、そこに描写される m³ty の内容にも差異が見受けられる。また、先行研究の多くは同史料の第125章上の「二柱のマアト」の図像と記述への言及に留まり、その他の呪文上の m³ty は十分に検討されていない。本発表では、「死者の書」における m³ty 研究の出発点として、先行研究の成果と課題を整理し、「死者の書」における m³ty の再検討の重要性を提示する。

前4世紀エジプトの軍事勢力をめぐる問題について

藤井 信之（関西大学東西学術研究所）

アケメネス朝ペルシア支配期（第27王朝）において殆ど史料に見られなかった軍事称号所持者が、最後の独立期（第28王朝～第30王朝）になると多数確認できるようになる。この発表では、これまで発表者が進めてきた後期王朝時代の軍事称号所持者のプロソポグラフィ研究の成果の一端に基づいて、近年の研究史上で問題となっているアレクサンドロス到来後の彼らの動向を検討したいと思う。アレクサンドロスの到来からプトレマイオス朝初期にかけて、エジプトの軍事勢力は少数ながらその一部は新たな支配者たちの軍制の中に取り込まれていたと考える研究者がある一方で、こうした見方に否定的な研究者もいる。

この発表では、史料の偏在の問題、史料の年代比定の問題、将軍号に付されるエピセツトの問題から先行研究の問題点を検討する。そして最後の独立期の軍事称号所持者がエジプト王国内においてどのような存在であったのかという点に留意し、古代エジプト史の文脈の中に将軍たちを位置付けてアレクサンドロス到来後の彼らと新たな支配者たちとの関係を考察したい。

カラノグ遺跡の階層性

坂本 翼（京都大学）

カラノグは、スーダン北部に栄えたメロエ王国（前4世紀～後4世紀）の社会構造を理解するうえで欠かすことのできない最重要遺跡の1つである。1907-1910年に行われた発掘調査によりメロエ語で記された碑文史料が170点以上も出土しており、碑文の内容から、かつてカラノグで生活を営んでいた集団の親類関係や役職などを垣間見ることができる。その頂点に位置するのが「総督 peseto」と呼ばれる有力者であり、例えば、後3世紀の総督アブラトイエはメロエ王家の代弁者としてエジプトとの交流に重要な役割を果たしていたことが判明している。ところが、明確な階層性の存在が指摘されているにもかかわらず、墓域の大規模な盗掘を理由として考古学的情報は等閑に付され、結果的に、碑文資料に大きく依存して組み立てられてきたメロエ王国の歴史像には少なからぬ再検討の余地が残されている。本発表では、カラノグで検出された785の埋葬施設を型式学的に検討、階層差を抽出し、そこから在地勢力の動態にせまる。

中期青銅器時代・後期青銅器時代南レヴァントの都市における市門の位置づけ
—市門の形態と機能の分析を通して—

間舎 裕生（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター）

本発表では、中期青銅器時代・後期青銅器時代の南レヴァント出土の市門の分析を通して、当時の都市の中における市門の機能について、新たな側面から考察する。南レヴァントでは、中期青銅器時代 IIB 期の都市の発展に伴い、居住域の周囲には土塁や市壁などの大規模な防御施設が建設されるようになる。市門はそれら要塞化された都市の出入り口として、同じく堅牢につくられている。都市の周囲の防御施設の建設は、中期青銅器時代 IIB 期から同 IIC 期をピークとして後期青銅器時代にもわずかに事例が知られ、市門の形態は、通路の両側に建てられた塔と、そこから通路側に突出した二対四本、ないし三対六本の「柱」によって特徴づけられる。

南レヴァントにおけるこういった形態の市門は、先行する時代に北レヴァント地方で普及し、土塁や市壁などの築造技術と共にもたらされたものと考えられている。土塁や市壁は外部からの敵の侵入を防ぐための機構であり、攻城戦略の変化に応じて発展していったとされる。防御施設の一部としての市門も、当然ながら軍事的側面に焦点を当てた研究が多くなされてきた (Burke 2008)。

一方で、都市が衰退する鉄器時代 I 期を経てイスラエル統一王国の時代である同 II 期には、物質文化の多くの側面において、以前とは異なる性格のものが登場する。市門もそのうちの一つで、門内部の柱や壁で囲まれた空間の奥行きが広がって部屋状を呈するようになる。これらの市門に対しては、考古学だけでなく旧約聖書の記述なども参考に、機能に関する研究が行われてきた。旧約聖書によれば、当時の市門およびその周辺は、単に都市の出入り口や防御施設の一部としてだけではなく、集会や裁判などが行われる、より公共性の高い場所であったとされる (Frese 2020)。

先述の通り、青銅器時代の市門に関しては軍事的な観点からの研究が専らであり、それ以外の機能の有無に関する検討はほとんど行われてこなかった。本発表では、鉄器時代の市門にみられる多様な機能が、新たな形態と共に導入されたものなのか、それとも青銅器時代の市門にすでに備わっていたものなのかという点について検討することで、青銅器時代の市門のより多面的な理解を試みる。

参考文献

- Burke, A. A. 2008: *Walled Up to Heaven: The Evolution of Middle Bronze Age Fortification Strategies in the Levant*, Winona Lake: Eisenbrauns.
- Frese, D. A. 2020: *The City Gate in Ancient Israel and Her Neighbors: The Form, Function, and Symbolism of the Civic Forum in the Southern Levant*, Leiden and Boston: Brill.

初期ビザンツ期パレスチナの教会堂構造—アプスと小礼拝堂の関わりについて—

藤澤 綾乃（東京文化財研究所）

イスラエル国／パレスチナ地域（以下、パレスチナ）では、現在までに初期ビザンツ期の教会堂遺構が400基ほど確認されている。とりわけ、地理的にユダヤ・サマリア地域と呼ばれるエルサレムとその周辺からの検出件数は顕著である。本発表は、教会堂建築のなかでも特に重要な機能をもつアプスとその周辺構造の型式変遷に焦点をあてつつ、隣接する小礼拝堂との関わりについて検討する。

教会堂建築で最も一般的な型式としては、バシリカ式が挙げられる。パレスチナでは、東端のアプスが壁の内側に収められ、その両対に小部屋を伴うバシリカ式が多く確認されてきた（Crowfoot 1941）。当該型式はパレスチナ全域で確認されており、オヴァディアはその集成と型式分類を行った（Ovadia 1970）。さらに、建築型式に関する分析が進んだことで、アプスの両対の小部屋は、6世紀頃に副アプスへと改変されていった事例があることも確認された。この分析はネゲヴ地域やガリラヤ地域の一部を対象にしたものであり、一連の型式変化は聖人崇敬や聖遺物崇敬の発展と関連づけられてきた（Negev 1974; Margalit 1989）。近年では、教会堂に隣接して建てられた小礼拝堂との関係性も見出されている。パトリックによれば、もともとは聖体拝領の儀の役割をアプスの両対の小部屋が部分的に担っていたが、6世紀頃から新たに導入された小礼拝堂にその役割が移されたとされる（Patrich 2006）。それによってアプスの両対の小部屋は閉ざされた空間から開かれた空間へと改修され、その中には、副アプスが設けられて別の機能を担う教会堂が出現し始めたという見解が得られた。これらの見解をまとめると、小部屋が閉ざされた空間であった場合には聖体拝領の儀の一部として使用され、開かれた空間であった場合には聖人・殉教者崇敬や聖遺物崇敬の役割を担っていたということである。この見解は、信仰の在り方の変化についてネゲヴやマルガリットの見解をより明確に支持したものであるが、ユダヤ・サマリア地域については大きく論じられていない。本発表では、現パレスチナ自治区に位置するユダヤ・サマリア地域の考古事例も加え、当該期のキリスト教信仰の在り方とその変遷について解明することを目指す。

分析は、現在までに発掘調査が行われているバシリカ式教会堂を対象とし、まず、アプスの両対に小部屋を伴う型式と副アプスを伴う型式の出現時期の比較を行う。次に、小礼拝堂の導入時期や出土遺物を確認し、アプス周辺構造の変化と小礼拝堂の付設との関係性について検討する。

東京国立博物館所蔵杯をもつヘラクレス像について

田辺 理 (宝塚大学)

ヘラクレスは、オリュンポス十二神の主神ゼウスの子供で、ギリシア神話に登場する半神半人の英雄である。ヘラクレスを表現した美術作品は、彫刻、陶器や金属器などの工芸品、モザイク画など、多岐にわたり、その作例は非常に多い。また、ヘラクレス像は東漸し、西アジアや中央アジアの美術作品にも表現され、就中ガンダーラにおいて釈迦牟尼の随伴者である執金剛神として仏教美術に取り入れられた。その結果、仏教美術とともに中国を経て日本までに伝わった。それ故、今日では、ヘラクレスはギリシア神話のみの英雄にとどまらず、全世界的な英雄といえる。

通常、ヘラクレス像は、筋骨たくましい男性が棍棒、弓矢、鎌などをもち、獅子の毛皮をもつないしは被る姿で表現される。しかしながら、東京国立博物館所蔵のヘラクレス像は、巻毛の髭を生やし、右手に棍棒をもち、左腕に獅子の毛皮をかけ、左手に杯をのせている。本像は、イラク北部のハトラから出土したヘラクレス像であるが、本像についての専論は内外において殆ど見当たらず、これまで研究対象となつてこなかった。それ故、本発表では、このヘラクレス像を考察し、この像の有する意味を考察する。

はじめに、ハトラ及びドゥラ・ユーロポスなどから出土したいくつかの杯をもつヘラクレス像を紹介する。つぎに、グレコ・ローマ美術に見られるヘラクレス像を紹介し、杯をもつ東京国立博物館所蔵のヘラクレス像がグレコ・ローマ美術のヘラクレス像に由来することを明らかにする。最後に、ウルスラグナ神、ネルガル神、ガッド神、バッカス神などの西アジアのヘラクレス神像が有する職能との比較考察を行い、東京国立博物館所蔵の杯をもつヘラクレス像の習合的意味を明らかにしたい。

GISによるアッカド王朝の中心都市「アガデ」の所在地探査
—ティグリス川の古代流路との関連性による一考察—

川上 直彦（長崎国際大学）

紀元前 2300 年頃、サルゴン王がアッカド王朝を設立し、古代メソポタミアに覇権を唱えた。そして、古代都市「アガデ」をその首都として新たに定めたことがわかっている。140 年以上前より、この「アガデ」の所在地が研究者により探査されてきた。いくつもの仮説が立てられ、具体的にいくつかの遺丘に推定されているが、「アガデ」の所在地は未だ解明されていない。しかし、これまでの先行研究から、「アガデ」がティグリス川の古代流路沿岸に位置していた可能性が高いことが明らかとなっている。「アガデ」の所在地を示す地理情報を包含する文献史料は多数存在する。それらの内、間接的または付随的に仮説を発展・展開させる必要なく、「アガデ」の所在地を、客観的にみて直接的に示している地理情報を包含する 6 つの文献史料にまず焦点を当て考察していく。これら 6 つを「直接的地理情報」と定義し、アッカド王朝時代に近い年代の文献史料の地理情報から順を追って考察していく。そして、「アガデ」の所在地に関するそれぞれの地理情報を、デジタル空間情報を処理する GIS (Geographical Information System) により地形図を作成して描写し、点ではなく、地域という面において、どこに限定できるのかを推定する。更に、これらの直接的地理情報が示したそれぞれの「アガデ」の所在地域を調和させ、更に狭い地域に限定する目的で、推定したそれぞれの所在地域がすべて重なりあう「アガデ」の中心所在地域がどこになるのかを、同様に GIS を用いて地図上に描写し推定する。

次に、ティグリス川沿岸に「アガデ」の所在地域を示している 3 つの文献史料が包含する地理情報について考察していく。そして、「アガデ」の中心所在地域とティグリス川の古代流路との密接な関係性を明らかにする。ティグリス川の古代流路は、現在の流路と違う場所を流れていたため、これらの史料の地理情報を基に、現在のティグリス川流路沿岸に直接的にアガデの所在地域を位置付けることはできない。そのため、これらの地理情報は、「間接的地理情報」と定義し、ティグリス川の古代流路が、「アガデ」の中心所在地域のどこを流れていたのかを GIS をつうじて SRTM (Shuttle Rader Topographical Mission) DEM (Digital Elevation Model) と呼ばれる数値標高モデルを用いた立体地形図から検証する。そして、間接的及び付随的に「アガデ」の所在地域を更に限定したティグリス川の古代流路沿岸地域に推定する。最終的には、限定したティグリス川の古代流路沿岸地域に、GIS によりジオレファレンスした遺丘の分布図をオーバーレイし、そこに「アガデ」と推定可能な遺丘が実際に存在するのかを分析し、その結果を結論として示す。

メソポタミアにおける暦注の注釈書の欠如に関する考察

菊地 咲 (ルプレヒト・カール大学ハイデルベルク)

その日の吉凶や活動規定を示す暦注書は、古代メソポタミアにおける多種多様なト占の一角をなす、暦占いの代表的なテキストに数えられる。ト占はその習得に特別な訓練を必要とする専門的な活動であり、そのテキストには他のテキストにはない専門用語が多く用いられている。ト占文書は紀元前二千年紀後半から一千年紀にかけて標準化が進み、既存の文書と口承伝統を元に、それぞれの占術領域について包括的な占いシリーズが作成された。例えば内臓占いシリーズや、天文占いシリーズ「エヌーマ・アヌ・エンリル」がよく知られている。これらシリーズは主要な参考書として、学者の書簡などに盛んに引用された。このようなテキストの難解さとその重要性から、ト占文書には多くの注釈書が作成された。実に、ニネヴェのアッシュルバニパルの図書館出土の注釈書・断片の約8割が、ト占文書を対象としている。しかし暦注書は、ト占文書であるにも関わらず、専用の注釈書を持たない。

本発表では、注釈書の欠如という暦注書の特殊性について、暦注の文書形態のひとつである編纂書と暦注を引用した学者の書簡に注目し考察した。暦注の編纂書はその文章構成と基礎テキストの表示方法において注釈書と高い類似性を示すとともに、基礎テキストに対する短い注釈が副次的に付加された例が確認できる。また学者の書簡にも、引用された暦注の文言に解説が施されている例が確認できる。これらの史料の検証の結果、暦注への注釈活動が、編纂書や書簡など、注釈書以外の場で行われ、注釈書とは異なる形で文章化されていたことが明らかになった。

ドゥムジからタンムーズへ—泣哭儀礼の様相—

江原 聡子（東京大学）

シュメルの都市国家に遡る古代メソポタミア文明期において、シュメル語でドゥムジ *Dumuzi*, アッカド語ではドゥウーズ *Du'ūzu* という神がおり、イナンナ女神やイシュタル神との関わりから冥界へ下る存在と考えられ、ドゥムジ-ドゥウーズ神の死を泣哭して嘆く儀礼が行われていた。その儀礼は現在、前18世紀のマリ文書まで確認することができると思われる。儀礼の行われる時期はバビロニア暦の第4月ドゥウーズ *Du'ūzu* 月であった。『旧約聖書』の「エゼキエル書」にもこの神のための泣哭儀礼がエルサレム神殿で行われている様子が記されており(8:14), その時ヘブライ人はこの神をタンムーズ *Tammūz* と呼んでいる。以来この神はこの名で呼ばれるのが一般的となった。

この神の死を嘆く泣哭儀礼は、初期キリスト教時代のシリア語の文書資料と9-10世紀のイスラーム期のアラビア語文献資料にも確認することができる。イスラーム期にもこの神はタンムーズと呼ばれていた。本発表においては、シリアとメソポタミアにおいて数千年に亘り継承されたドゥムジ-タンムーズの泣哭儀礼の様相を、古代メソポタミア文明期からイスラーム期まで文書資料を中心に考察する。

新アッシリア帝国の拠点都市の周辺景観—ヤシン・テペ考古学プロジェクトからの考察—

西山 伸一（中部大学）

渡部 展也（中部大学）

西アジアの古代都市についてはさまざまな考古学研究がなされてきたが、その周辺景観に関する研究はまだ途上にあるといえる。1960年代以降のセトルメント・パターン研究は、都市とその周辺に広がる村落の空間の存在を明確にした。1990年代からは、衛星画像の解析を利用した都市空間の分析とホローウェイ（hollow way）などの都市間をつなぐ交通路や水路の検証、および遺跡周辺の Off-site survey などによって、都市周辺の景観分析に大きな貢献をしてきた。

しかし、新アッシリア帝国（前10～7世紀）の都市とその周辺については、まだ不明な点が多い。本発表では、イラク共和国クルディスタン地域南部に位置する都市遺跡ヤシン・テペの考古学調査の成果から都市とその周辺の景観を分析した最新成果について考察する。

発表では、1) 都市遺跡の「直近」周辺（約1平方キロ）における地理考古学踏査（2019年）、および2) 都市遺跡周辺（約3平方キロ）の考古学踏査（2018年）の成果について報告し、遺跡の周辺景観の特性について考察する。

ヤシン・テペは、新アッシリア帝国の東部辺境に位置する拠点都市と考えられ、近年の考古学調査でもアッシリア文化との強い結びつきを占めず発見（エリート層の邸宅や未盗掘レンガ墓など）が相次いでおり、帝国の拠点都市であった可能性がますます高まっている。また都市の規模は、40ヘクタールを測り、ザグロス山脈西山麓では有数の都市であったことは確実である。

踏査の結果、ヤシン・テペの直近には1ヘクタール未満の小さな集落があることが複数点在することがわかり、さらに少し遠方には2ヘクタール未満の集落が複数存在する。アッシリアの拠点都市がどのような周辺景観をもっていたのか、ヤシン・テペの成果を他の地域の都市遺跡の事例と比較することで考察する。このことは、アッシリア帝国の都市景観の変遷とその要因の解明に貢献すると考えられる。

ブローケン・オベリスクの王
—アッシュル・ベール・カラか、ティグラトピレセル一世か—

柴田 大輔（筑波大学）

1853年、ホルムズ・ラッサムはニネヴェにおいてアッシリア王のオベリスクの頭部断片を発見した。現在は大英博物館に登録番号 BM 118898 として保管されるこのオベリスク断片は、ブローケン・オベリスクの名で知られ、そこに刻まれた碑文はアッシリア史研究における重要史料の一つに数えられている。ブローケン・オベリスクの碑文にはこれを作成したアッシリア王の名が残っていなかったため、20世紀の中頃までは、オベリスクの王の正体をめぐり諸説が唱えられた。しかし、1930/31年にエルンスト・ワイドナー（AfO 6, esp. 88–94）、さらに1961年にリークレ・ボルガー（HdO Erg. 5.1.1, 133–142）がこれをアッシュル・ベール・カラ（1073–1056）の碑文と同定した後は、この説がいわば定説になり、例えばカーク・グレイソンのアッシリア碑文校訂もこの説を採用している（RIMA 2, A.0.89.7）。しかし、最近になってビーケ・マヒウは前二千年紀後半のアッシリアの暦に関するその論文の中で、ブローケン・オベリスクをティグラトピレセル一世（ca. 1114–1076）の碑文とする大胆な仮説を提案した（SAAB 24, esp. 78–86）。この仮説は非常に興味深い一方で、マヒウは論点を十分には検討しておらず、関連する史料も渉猟していないうえ、その説には明らかな誤謬も含まれる。そこで本発表はボルガー説の論拠をもう一度整理し、その後に発見された新史料も含む関連史料を精査することによって、ブローケン・オベリスクの王の正体についてもう一度検証する。主な論点は、ブローケン・オベリスクに言及される紀年職（*līmu*）、アッシリア暦とバビロニア暦の関係、異なる碑文の間で共有されている文言である。その結果、ボルガーの研究の後に発見された新史料を含めて検討すると、確かにティグラトピレセル一世に碑文が帰属する妥当性の方が高いことが明らかになる。最後に、ブローケン・オベリスクの情報を他の史料と付き合わせることによって、ティグラトピレセル一世の治世末期における政治史を再構成する。

被征服民のアッシリア帝国への帰属をめぐる一考察

山田 重郎 (筑波大学)

アッシリアの領土拡大にともなう被征服民の大量捕囚・再定住政策の目的については、二つの対立する見解が示されてきた。すなわち、再定住政策の目的は、国家全体に単一のアイデンティティを持った「アッシリア人」集団を作り出すことにあった、という見解と、複数の異なるアイデンティティを持った住民たちを競合させることで、彼らの新しい環境における抛り所たる王への忠誠心を高めることにあった、という見解である。また、アッシリア人は、被征服民を、宗教、言語、度量衡、社会慣習などにおいて、文化的にアッシリア人に同化する政策をとったのか否かも議論されてきた。

この発表では、こうした論点に留意しながら、王による被征服民の吸収と国家統一を象徴的に表わしているとみられてきたアッシリア王室碑文に現れる表現について検討する。すなわち *itti nišī māṭ Aššur manū* 「(被征服民を) アッシリアの人々と見なす」、*kīša Aššurī emēdu* 「(被征服民に) アッシリア人のように (貢納と労働の義務を) 課す」、ならびにそれに類似する表現である。こうした表現が王室碑文においてどのような文脈で現れるのか (あるいは現れないのか) を通時的に分析し、それがアッシリア帝国の形成過程において変化していったアッシリア王の政治思想的関心と帝国経営の施策をどのように反映しているのかを考察する。また、これらの表現は、アッシリア帝国の住民のどのような均一性・統一性を問題としているのかを、行政文書中に現れる「アッシリア人 (*Aššurāyu, Aššurī, mar'a māṭ Aššur*)」という表現の用法と比較して、考察する。これによって、王室碑文に現れる「アッシリアの人々 (*nišī māṭ Aššur*)」とは、アッシリア国家の政治的・行政的統一体の構成員であることを意図しており、民族的・言語的同化や宗教文化的統一を問題にするものではないことを確認する。

紀元前1千年紀バビロニアの都市の家族における女性の役割

渡井 葉子（中央大学）

紀元前1千年紀バビロニア（新バビロニア時代・アケメネス朝ペルシア時代、とりわけ紀元前7世紀から紀元前5世紀はじめまで）のバビロニアの都市に居住する家族・一族の経済や活動において、女性メンバー（とくに家長の妻）がどのような立場に関わり、家族の経済にどのような影響を与えたのか、その影響の度合いには家や女性個人によって違いがあるのか、あるとすればどのような違いがあるのか、について考察する。

紀元前1千年紀バビロニアの文書には、自由人身分で仕事を持つ女性や、なんらかの職能で王宮や神殿に仕える女性はほとんど登場しない。一方で、経済活動（銀・農産物の債権者・債務者、家の賃貸、耕地の小作契約等）を行う女性は少なからずいた。自由人身分の女性は、しかるべき年齢で結婚し、多くは家という枠組みの中である程度の経済的自由を得ることができた、といえる。

本発表では、①結婚するときには妻の実家から夫に与えられた「嫁資」（ただし所有権は妻にあり、親から未婚の娘に分与されている例もあるため、実質的には女性の相続財産といえる）が、夫の家でどのように使われたか、②女性たちがどの程度みずからの裁量で経済活動に関与しているか、③女性が家庭において果たしていた経済的役割、の3点に着目する。ケーススタディにより、ある程度富裕層に属する家の女性たちが家庭内で置かれていた立場・状況および果たした役割の多様性をあきらかにし、そこには（夫の家と妻の実家のパワーバランス等）なんらかの要素が作用していたのかについて検討したい。

ヒッタイトの祭儀における神々に近づく際の所作についての一考察

山本 孟（日本学術振興会特別研究員・同志社大学）

本発表では、ヒッタイト王国の祭儀において行われた、頭を下げることと跪くことを組み合わせた儀礼行為について考察する。祭の行程を記した文書や儀礼文書などでは、王や王族、あるいは神官が、神殿などで頭を下げ、跪くという行為に言及されることがある。本発表では、それらの儀礼行為がどのような場面で行われたのかを整理する。行為者と行為の回数、それらが行われる神殿施設に着目して、組み合わせられた一連の動作の意義を理解することを目指す。

都市アリンナで行われた祭儀を記録した文書などからは、王が神殿に入るとき、特に階段を伴った神殿に入る際に、頭を下げ、跪いてから、もう一度頭を下げていたことがわかる。また、「雷の嵐の神」に対する祭でも、王が神殿内の建物で「窓」に対して頭を下げ、跪き、もう一度頭を下げるという一連の流れがあった。他のいくつかの祭儀文書からは、このように神殿などに入る際に頭を下げてから跪くという行為が、王妃や王子によっても行われることがあったことがわかる。

また、行為の回数に注目すると、跪く動作の前後に二度頭を下げるという動作は、確認できる限りでは、王の行為としてのみ現れる。また、野外の聖域における祭儀を記録した文書からは、その施設に入る際には、王は二礼するものの、跪かないとされることもある。また、別の祭儀文書からは、神官が三回礼をし、三回跪いてから神々の像に接することがあったこともわかる。年代記や書簡などの歴史的な文書からは、このような礼と跪きを組み合わせた行為は、政治的な服従を表す場合にも行われていたことがわかるため、上位の相手に服従を示しながら、発言する際の所作であったと考えられる。

聖書ヘブライ語の不規則変化名詞に見られるセゴル型の痕跡
—名詞の語幹交替を踏まえた新しい分類方法の提案—

高橋 洋成（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

I. 本発表は、名詞類の屈折の体系性（特に単数形と複数形の語幹交替）に着目することで、従来は不規則変化と呼ばれていたものを、共時的あるいは通時的にセゴル型として説明しうることを示す。議論の見通しを良くするため、発表者は再建形に弱アクセント表記を用いる。たとえば、/a/ は弱母音を表し（ティベリア表記では開音節でカマツ a）、/ä/ は最弱母音を表す（開音節ではシュワ化ないし脱落）。さらに、語末のプロミネンスを /ä/ のように表記する。

II. セゴル型とは、起源的に CVCC- 語幹であるものを言う。この型に属する語の多くは、接尾辞を持たないときに語末の子音連続を避けるため母音 ϵ （セゴル）を挿入し、CVC ϵ C# になったことからそう呼ばれる。また、セゴル型の複数形は3つに分類できる。(A) CVCaC 型と同じ CC ϵ C- 語幹になるもの (e.g. 「王」 מֶלֶךְ *mélek* /*māl ϵ k/ → מְלָכִים *mləkim* /*mälä ϵ k-ī:m/), (B) CaC 型と同じ C ϵ C- 語幹になるもの (e.g. 「日」 יוֹם *yom* /*yawm/ → יָמִים *yənim* /*yäm-ī:m/), (C) 語幹が変わらないもの (e.g. 「鞭」 שׁוֹף *šoṭ* /*šawṭ/ → שׁוֹפִים *šoṭim* /*šawṭ-ī:m/) である。

III. 以下に実例を挙げる。(1) 「町」 עִיר *sir* は従来 Ci:C 型に分類されてきた。その複数形は עִירִים *ʕirim* という不規則なカタチであるが、士師記 10:4 に עִירֵי ʕy ϵ irim という別形が見られ、/*ʕīr/ → /*ʕiyär-ī:m/ という語幹交替を確認できる。ゆえに、עִיר *sir* はセゴル型 (A) に属する CiyC- 語幹であり、むしろ一般的な複数形 עִירִים *ʕirim* /*ʕär-ī:m/ は二次的に形成されたものと考えられる。(2) 「男」 אִישׁ *is* 「男」も従来 Ci:C 型に分類されてきた。その複数形は אִנְשִׁים *ʔnšim* と不規則であるが、語幹自体はセゴル型 (A) の CC ϵ C- 語幹と同じであり、単数形語幹を逆成すれば /*ʔnš/ を導出できる (*ʔnš → /*ʔnš-ī:m/)。この /*ʔnš/ というカタチを比較セム語学的に確認することはできないが、複数拘束形のカタチ (אִנְשֵׁי ʔnše /*ʔnš-è:/), 女性形のカタチ (אִשָּׁוּ ʔiššə /*ʔnš-ä/) などから、形態論的な基底形として /*ʔnš/ が要請されるのは明らかである。ゆえに、発表者は אִישׁ *is* をセゴル型 (A) に属する CinC- 語幹と主張する。(3) 従来 CiC 型に分類されてきた בֶּן *ben* 「息子」も、不規則な複数形 בְּנִים *bonim* を持つ。だが、セゴル型 (A) の語幹交替 CV<CC> → CV<CaC> の拡張部分に着目すると、/*bn (> *bin) → /*bän-ī:m/ のように当てはめることができ、複数形語幹に母音 /*a/ が出現することを説明しうる。ゆえに歴史的な形態音韻論の観点から、בֶּן *ben* は2子音セゴル型 (A) の *CC- 語幹であったと発表者は主張する。語幹拡張母音 /*a/ については、セム祖語の古い複数標識 *-ah との関連性を指摘しておきたい (e.g. 「神々」 אֱלֹהִים *ʔlohim* < /*ʔila:h-i:ma/, ウガリト語「家々」 *bhtm* (*bahatu.ma?*)。以上のように、従来は不規則変化とされてきたものの中には、セゴル型の体系を示すものが存在する。

ヘブライ語聖書における「レファイム（死者）」と死者儀礼

新井 雅貴（同志社大学神学研究科）

古代オリエント世界において死者は崇拜の対象とされた一方で、ヘブライ語聖書はヤハウエ神のみを崇拜することを主旨としており、死者儀礼に対して批判的な態度を示している。だが、ヘブライ語聖書は死後の存在自体を否定しているわけではない。ヘブライ語聖書にみられる死者のうち、レファイム (*rəpā'im*) は冥界の霊的な存在としての死者を指す語である。本発表は、ヘブライ語聖書におけるレファイムの意味を検討するとともに、レファイムと同語根が想定されるウガリト語、ラパウマ (*rapa'ūma*) との比較を行い、死者儀礼の観点からその役割を考察することを目的とする。

イザヤ書 14 章では、死亡した「バビロン王 (*melek bābel*)」がレファイムの一員となることが想定されており、加えて、レファイムが「地の英雄達 (*'atūde 'āreṣ*)」や「異邦人の王達 (*malkē gōyim*)」と言い換えられることから、レファイムはイスラエルにとっての他国の王家の死者を指す語であることが推察できる。また、箴言 2 編 16–19 節は、異国の慣習に従うことがヤハウエとの契約に反する行為であり、神に罰せられて死に至る原因になることを警告する文脈であるが、ここでは死者儀礼が異国の慣習として想定されており、レファイムが崇拜の対象となり得る死者であることが示唆される。

その一方で、ウガリトの儀礼文書 *KTU* 1.161 において、ラパウマはウガリト王家の祖先であることが伺える。彼らは王の葬儀の際に、冥界から儀礼の場である墓に呼び出され、供物を捧げられるが、そこには祖先からの系譜を示すことで、王家の伝統と継承される王位の正当性を主張する目的がある。すなわち、ラパウマは王家の祖先として王権を保障する権威のある死者であるといえる。

これらをふまえると、ヘブライ語聖書におけるレファイムとウガリトのラパウマとの最大の違いは、自国の王の祖先を意味するかどうかという点にあるといえる。他国の王家の祖先というレファイムの定義は、イスラエルにおいてレファイムに対する儀礼が無意味であることを示すものである。このように、ヘブライ語聖書はレファイムの重要性を排除することにより、死者の存在そのものを否定することなく死者儀礼を批判し、崇拜対象をヤハウエ神に限定しようとしたと結論付けられる。

アラビア語の名詞文の主語の限定性と特定性

榮谷 温子（慶應義塾大学）

正則アラビア語において、通常、名詞文の主語 (mubtada') は限定でなければならないが、非限定名詞句であっても、特定化 (takḥṣīs) されている場合および一般化 (ta'mīm) されている場合には、それも名詞文の主語となりうる。

特定化 (takḥṣīs) は、形容詞や前置詞句による修飾 (明示された形容詞や前置詞句以外に、暗示された修飾語句による修飾や、指小形を含む) や、非限定名詞を用いたイダーファによってなされる。(例: rajulun ṣāliḥun 「高潔な男」、rujaylun (= rajulun ṣaghīrun) 「小さい男」、khamsu ṣalawātīn 「5回の礼拝」など。)

これに対して、一般化 (ta'mīm) は、一般を表す形式、例えば kull (all や every の意) などや、否定によってなされる。(例: {kullun la-hu qānitūna} 「あらゆるものが、彼 (アッラー) に、恭順の意を表す」、mā rajulun fī al-dāri 「その館の中には男はいない」など。)

そもそも、特定化 (takḥṣīs) という用語は、アラビア語文法学の初期すなわち Sībawayhi の al-Kitāb やその直後の文法家たちの文法書ではまだ使われていなかった用語ではあるが、限定化 (ta'rīf) と非限定化 (tankīr) の交わる範疇を示すものであり、十分な考察が必要とされるものである。

本発表においては、特定化 (takḥṣīs) と一般化 (ta'mīm) について文法書の例文、特にアル＝クルアーンの聖句をとおして再考し、これらが名詞文の主語となりうることについて、その他の文法項目 (例えば、「同格」など) の規定も参照しつつ、また、先行研究で、特定化 (takḥṣīs) や限定化 (ta'rīf) に関連した用語として挙げられているところの、明細化 (takhlīs)、明確化 (tawdīh)、明瞭化／説明 ('idāh) という用語やその意味するところを確認しつつ、限定との関係という視点から考察を行う。

現代アラビア語の標準化とクルアーン読誦学における流派間競合
—ハフス流派の優勢化について—

竹田 敏之（京都大学）

本発表の目的は、「アラブ世界」における国語／共通語としての現代アラビア語が整備される過程で、その標準化のプロセスに聖典クルアーン読誦流派がどのような影響を与えたのかを考察することにある。

読誦流派については、イスラーム諸学の発展の中で7あるいは10の流派を正統とするコンセンサスが成立している。しかし、オスマン朝の時代にハフス伝承のアースィム読誦（以下、ハフス流派）が域内の公式な流派となり、その後1923年にエジプトでクルアーン刊本（いわゆる「ファード版」、および改訂版〔1952年〕）が登場すると、その普及によってハフス流派の優勢化はイスラーム世界で一気に加速した。その他の流派は、現代ではオスマン朝の政治的・法学派的な影響が少なかったマグリブ地域や西アフリカ（ワルシュ流派、およびカールーン流派）、スーダンおよびイエメンの一部（ドゥーリー流派）などに留まっている。

イスラーム諸学の史的展開から言えば、ハフス流派は長らく読誦流派の主流ではなかった。例えば、ザマフシャリー（1144没）やクルトゥビー（1273没）、スューティー（1505没）などの啓典解釈書はどれもハフス以外の読誦流派に依っている。また、読誦流派学に関する伝統的な韻文要綱、通称『シャーティビーヤ』もカールーン流派を主軸に編まれたものである。

ところが、ワルシュ流派を採用したマグリブやカールーン流派が優勢なチュニジア、リビアなども含めた「アラブ世界」の共通語である現代アラビア語は、音韻や発音の面ではハフス流派の特徴が顕著であり、他の読誦流派の影響はほとんど見られない。例えばハフス流派以外で顕著なイマーラ（a音がi音に傾く現象）は、一般的には方言的特徴の一つと認識されている（シリア・レバノン方言など）。同様にハムザ音の脱落やアリフ/ワーウ/ヤーへの交替も、学校文法やメディアでは標準的とは見なされていない。またワルシュ流派の特徴であるナクル（ハムザの母音がその前の子音に移行する現象）も、現代アラビア語には反映されていない。

本発表では、こうしたクルアーン読誦学の諸規則を整理し、文法書（特に近代以降）における関連事項の記述と比較することで、ハフス以外の読誦流派が有する特徴が学校文法の成立過程で削除されてきたこと（あるいは採用されなかったこと）、そしてクルアーン刊本や音声メディアの流通と並行しながら現代アラビア語がハフス流派の規範に即した形で標準化されてきたことを明らかにする。すなわち、現代アラビア語が「正しさ」の根拠とするクルアーンとはハフス流派を基調としたものであり、その他の読誦流派やアラブ諸部族の方言的特徴を正用法として積極的に採用していた古典期の規範とは明らかに異なることが指摘できるのである。

ペルシア語における動詞の過去分詞と同形の形容詞は本当に形容詞か

五十嵐 小優粒 (国際医療福祉大学)

“havā ālūde šod (大気が汚染された)”の“ālūde (汚染された)”は他動詞“ālūdan (汚染する)”の過去分詞なのか、これと同形の形容詞なのか。本発表では、この問いに対して2つの判断基準を立てて考察する。

ペルシア語には、このような動詞の過去分詞と同形の形容詞が、黒柳(1996)で確認できるものとして95個ある。まずは、この動詞と形容詞の連続性について、渡邊(2012)の英語における類似した事例に対する考察結果を参照し、ペルシア語のšodan構文の構成要素が、動詞の過去分詞なのか、同形の形容詞なのかについて考察する。その判断基準として、

(1) 動作主が存在するか(人為的な行為か否か)、また、事象の他動性の高さ、(2) 対応する能動形があるか、(3) 「とても」や「より」といった副詞で修飾や比較ができるか、の3点に着目する。ペルシア語では、他動詞の過去分詞も同形の形容詞も、事象の結果残存や状態変化の結果継続を表わす。そのため、圧倒的多数のšodan構文が上記の(1)(2)を満たしており、(3)を満たせるもののみが形容詞寄りである可能性が浮上する。

本発表ではさらにもう1つ、“kardan(～する)”を付けて複合動詞になれるか否かという基準を提言する。この“kardan”は、「名詞や形容詞を伴って、複合動詞になる」もので“ālūde kardan(汚染する)”は成立する。このことから、冒頭の問いの答えは「形容詞」である可能性が高い。しかし、“*košte kardan(殺害する)”や、“*nevešte kardan(記述する)”は成立しない。“košte”も“nevešte”も多くの辞書に形容詞として記されているが、果たしてそれでよいのか再考の余地に言及したい。

最後に「形容詞とは何か？」という問いを立てて考察する。そもそも形容詞とは、“mard-e bozorg(大きい男性/大男)”のように、単独で名詞に後続しそれを修飾するものである。ところが、“havā-ye ālūde(汚れた空気)”は成立するが、“*esm-e nāmīde(名付けた名前)”は文法性判断で正しいとは言えない。“nāmīde”もまた、辞書には形容詞としての記述も存在するにもかかわらずである。

これらを真に形容詞であるとするならば、記述文法において、ペルシア語の形容詞の特徴を追記しておくことが求められよう。

コプト語の母音音素目録の再整理

—コイナー・ギリシア語およびアラビア語との言語接触と古代エジプト語史の観点から—

宮川 創 (関西大学東西学術研究所 PD)

コプト語は、5000年以上の世界最長の書記記録を有するエジプト語の最終段階である。本発表では宮川 (2018) で支持した、コプト文字エータとオメガがエプシロンとオミクロンに対してそれぞれ開口度が狭く、母音字重複は長母音を表すという説について、更なる検証を加え、コプト語サイド方言の母音音素目録を再整理する。コプト語学の従来の説では、エータがエプシロンに対してオメガがオミクロンに対して長母音であり、コプト語以前のエジプト語における声門閉鎖音および有声咽頭摩擦音を表す子音字との対応から、母音字重複は母音と声門閉鎖音を表すという説明がなされてきた。これに対し、Kuentz (1934) が提唱し、Greenberg (1962) が構造主義言語学的に補強した説では、エータとオメガはエプシロンとオミクロンよりも開口度が狭い母音で長短の区別はなく、母音字重複こそが長母音を表すとされる。宮川 (2018) では、Kuentz–Greenberg 説を支持する結果を提示し、更に本説を発展させたが、強勢位置に関する観点が欠如し、扱っているデータも限られていた。本発表では、Kuentz–Greenberg 説を強化する新たな証拠をコプト語におけるコイナー・ギリシア語およびアラビア語からの借用語とコプト語以前の古代エジプト語のデータから示す。そして、強勢位置についても、強勢音節と非強勢音節で現れる母音字が限定されているため、考慮に入れる。こうして新たな証拠で補強したエータ・オメガ開口度説と母音字重複長母音説、および、強勢・非強勢音節の母音字分布の対立を基に、コプト語サイド方言の母音音素目録を整理し、より合理的で新しい母音体系を提示する。

[参考文献]

Greenberg, Joseph Harold (1962) “The interpretation of the Coptic vowel system,” in *Journal of African Languages*, 1: 22–29.

Kuentz, Charles (1934) “Quantité ou timbre? A propos des pseudo-redoublements de voyelles en copte,” in *Comptes rendus du groupe linguistique d’études chamito-semitiques*, Paris: Geuthner, vol. 2: 5–7.

宮川 創 (2018) 「コプト・エジプト語サイド方言における母音体系と母音字の重複の音価: 白修道院院長・アトリペのシェヌーテによる『第六カノン』の写本をもとに」『言語記述論集』9: 173–188.

クルド語クルマンジー方言の無接続詞文

村上 武則（京都大学）

クルド語クルマンジー方言にはしばしば接続詞があるべきところに無い、あるいは接続詞を使わなければ他の言語に正確な翻訳が出来ないような文が現れることがある。副詞節を形成して複文を作る場合に節同士の関係を明示するための「もし～ならば」「～の時」などに当たる接続詞類が使われず、かつ節の動詞が仮定や条件を含意する特殊な形をしていないにもかかわらず複文として理解される、あるいは他言語に翻訳するならば複文になるものが存在する。2つの節の間に逆接関係がある場合にも「しかし」に当たる接続詞表現が現れず、口頭では特に文終止の休息を置かず、文章ではピリオドで区切らずに単に2つの文が並んでいるかのような文表現形式を取ることがある。これらを古典ギリシア語の文法学用語に倣って無接続詞文(Asyndeton)と呼ぶ。無接続詞文自体は書記言語においては書き手の不注意や未習熟によっても容易に引き起こされうる現象であり決して珍しいものではないが、クルド語クルマンジー方言の無接続詞文はそれが口語と文章語の両方に広く見られ、自然な正しい文としてクルド語話者に認識されている点が異なっている。文を発話する際の文全体のイントネーションについても無接続詞文特有のパターンが確認されず、接続詞を有する複文と何ら変わりが無いことから話者が無接続詞文を特殊な現象として認識しておらず接続詞の有無が文の分類意識に結び付いていないことが裏付けられる。また2つの動詞を用いて「AしてBする」のように続けて起こる動作を表現する場合にも「て」に相当する接続詞あるいは動詞の分詞形などが現れずに「ABする」のような動詞連続が観察され、これも無接続詞文の一種として考えられる。クルド語クルマンジー方言話者の大多数がトルコ語とのバイリンガルであり、無接続詞文にはトルコ語の副動詞を用いた文の影響が考えられ、実際に話者がトルコ語の副動詞文をクルド語に翻訳した際に無接続詞文となって現れやすいことが確かめられるが、一方で古代・中世イラン諸語にもクルド語の無接続詞文と類似した現象が見られることから、トルコ語との言語接触がクルド語における無接続詞文使用の選好に影響を与えていることは主張できても、クルド語の無接続詞文自体が通時的にトルコ語との言語接触に起源を持つとは言えない。

以上の分析から本発表では無接続詞文がクルド語クルマンジー方言において決して不規則な現象ではなく、むしろ接続詞の有無で単文と複文を分類しようとするような文法観や接続詞の概念自体に見直しの必要があることを主張する。

イブン・アラビーの信仰論と「神の変容」のハディース

相樂 悠太（東京大学）

イブン・アラビー（1240年没）の神秘主義的聖典解釈に関する従来の研究では、彼の思想に対するクルアーンの影響が議論されたが、彼によるハディースの利用は、一部の神聖ハディースを除きあまり注目されない。スーフィーたちが引用するハディースには、ハディース学の見地からは確実性が認められないものも多い。これに対し、イブン・アラビーが最も好んで引用したハディースの一つに、アブー・サイード・フドリーらが伝え、ムスリムとブハーリーの『真正集』に収録された、復活の日の見神について述べたハディースがある。本発表では『マッカ開扉』や『叡智の台座』などの著作の中でこのハディースに言及したイブン・アラビーの議論を検討し、彼によるこのハディースの利用の仕方や解釈の内容を分析することで、このハディース本文の内容が彼の思想の中に有機的に位置づけられていることを明らかにする。

復活の日の人類の集合から彼らが来世に入るまでの情景を物語る上記のハディースのうち、来世に入る前の信徒たちに対し神が複数の姿をとって現れる一場面にイブン・アラビーはとくに注目する。そのとき最初に現れた神の姿を信徒たちは拒絶し、神であることが彼らに分かるような別の姿に神が「変容」としてハディースは伝える。この「神の変容」を現世と来世を通じた絶え間ない神の顕現の原理を示すものとして解釈することで、イブン・アラビーはこのハディースの意味をその終末論的文脈から切り離す。そして、ハディース中で神の顕現を目の当たりにした人々が神の特定の姿のみを神と認めたことに基づき、人間は自身の信仰によって無限なる神を限定するのだと説く「信仰によって創られた神」という独特の概念を提示する。さらに、自らの限定的な信仰から神を解き放つ者は、神の多様な顕現のあらゆる姿を一なる神の変容としてみることができると述べ、この境地を「完全人間」の理想的な信仰のあり方として描く。このようにイブン・アラビーの信仰論は「神の変容」のハディース本文の内容と緊密に連動しつつ展開される。

ハディース学的権威づけのもと一般信徒に聖典として共有されていたハディースを用いることで、イブン・アラビーは自身の信仰論を神秘主義の伝統のうちに閉ざされたものではなく、全信徒にとって切実な問題として提起しようとしたのだと考えられる。クルアーンの章句の解釈がすでに一定の発展をみせ、ハディースについては秘教的内容のものが重視される反面ハディース学的知見が軽視される傾向にあった当時の神秘主義思想の状況において、『真正集』に収録されたハディースに基づくイブン・アラビーの信仰論は神秘主義的聖典解釈の新たな可能性を拓く試みだったといえる。

十二イマーム派による初期のキリスト教史理解—同派伝承中のペトロ・パウロ観をもとに—

平野 貴大（日本学術振興会）

本発表は、初期のキリスト教の2人の聖人ペトロとパウロに関する十二イマーム派伝承を分析し、同派においてペトロが肯定的な評価を受けるのに対して、パウロは否定的な評価を受けていることを示す。この分析を通じて、本発表では十二イマーム派のキリスト教史理解の一端を明らかにしたい。ペトロ(アラビア語でシャムウーン *Sham'ūn*)はイエス・キリストの十二使徒の1人であり、パウロ(アラビア語で *Būlus*)はペトロと同時代の人物で、新約聖書の一部が彼に帰されている。イスラームのクルアーン解釈、ハディースにおいては、預言者イーサー(イエス)に関する物語の中で彼らについての言及が為される。とりわけ十二イマーム派の伝承集やクルアーン解釈においては、ペトロとパウロは以下のような対照的な位置付けが為されている。

ペトロについては、十二イマーム派伝承中で度々彼の功績が言及されている。同派伝承におけるペトロについての重要性は以下の5つの点にまとめられよう。それらは(1)ペトロはイーサーのワスィー(遺言執行人)、(2)ペトロの宗派のみの救済、(3)イエスによるペトロの指名、ペトロによる後継者の指名、(4)ペトロの奇跡、(5)イマームたちの祖先としてのペトロ、の5つである。(5)においては十二イマーム派イマームたちとペトロの間の血縁関係を主張するものであり、(1)から(4)はシーア派の「イマーム性(ワスィー性)」をペトロに見出すものである。そのため、同派が預言者イエスの後継者ペトロと預言者ムハンマドの後継者たるアリーの類似性を主張していたことがわかる。

それに対して、パウロについては、十二イマーム派伝承において彼への言及はほとんどなく、パウロに言及する数少ない伝承の中には肯定的なものではなく「キリスト教の開祖」としての否定的な評価が与えられていると言える。

以上の十二イマーム派のペトロ観・パウロ観にはそれぞれ、シーア派的視点とイスラーム的視点が反映されていると考えられよう。十二イマーム派では「地上はフッジャ(預言者とイマームの総称)」という原則に基づき、最初の人間アダムから最後の日までのフッジャの存在が信じられている。預言者イーサーと預言者ムハンマドの間の「空白期間(*fatra*)」を埋める最初のフッジャがペトロであり、シーア派初代イマーム・アリーに非常に近い宗教的位置付けが与えられていると言える。同派のペトロ観は同派のイマーム論を過去へと投影したものとも考えられるかもしれない。それに対して、イスラームの自己認識ではアダムからムハンマドまで全ての預言者たちは同じ「イスラーム」の教えを説いていたのであり、その意味での「イスラーム」から外れたキリスト教は「逸脱した宗教」と見なされる。その逸脱性が新約聖書の著者の1人であるパウロに帰され、彼が「キリスト教」の開祖と見なされたのだろう。

フルーフィー教団における所謂「神の時代」について

角田 哲朗（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

フルーフィー教団 (Ḥurūfiyya) とは、自称マフディーたるファドルッラー・アスタラーバーディーが創始した千年王国主義的なセクトである。文字と数に着目して独自の教説を展開したファズルッラーは、1394年にティームール朝当局に処刑されるも、その後も教団員らは精力的な著述活動を継続し、ファドルッラーは「神」と称揚されるまでに至った。

さて、本報告では、フルーフィー教団の著作に確認される時間論に着目する。それに従えば、被造世界の歴史は①アダムに始まりムハンマドに封印されるまでの「預言者の時代」；②アリーに始まりファドルッラーに封印される「聖者の時代」；③その後に到来する「神の時代」(rutbat-i ulūhiyya) に分割されるという。このような3区分に基づく時間論はファドルッラーの著作群には見受けられず、彼の直弟子のサイイド・イスハーク(1428年以降没)の創案であったとみられる。先行研究は膨大なフルーフィー文献のうち、校訂を施された数少ない著作であるサイイド・イスハーク著『親愛の書』(Maḥram-nāma) にのみ基づいて時間論を紹介してきた。しかし、同著作は多岐に渡るテーゼが曖昧かつ難解な文体で記述され、更にはアスタラーバード方言で著述されていることも相まって、各「時代」に関する具体的な検討はなされてこなかった。本報告ではこの『親愛の書』に加えて、同著者の『土の書』(Turāb-nāma) を用いる。正則ペルシア語で記されたこちらの史料は『親愛の書』の時間論を補う目的で著された論考であり、サイイド・イスハークの時間論を検討する上で参照されるべき重要作品であるが、先行研究では一切顧みられてこなかった。

報告者がこの時間論に着目する理由は次の通り。第一にサイイド・イスハークの著作に描かれる「時間」(zamān) は上記の3区分に基づく「直線的」なものの外に、「循環的」なモデルも提示されていること。そのモデルに従えば、世界は「始まり」(bidāyat) から「終わり」(nihāyat) までをひとつの「周期」(dawr) として、同一事象が発生する数百万回もの「周期」が「コンパスで円を描くかの如くに」反復されるという。このように一見すると相反する2つのモデルが提示されるサイイド・イスハークの時間論は、どのように調停できるのだろうか。第二に、教団内でのファドルッラーの位置づけが未整理であるという点である。遅くとも彼の孫弟子世代の著作ではファドルッラーは当然のように「神たる御方」(ḥadrat-i ilāhī) などと表現される。しかしながら、彼がいかなる意味において「神」であったのか、そうした説明を当の記述から引き出すことは困難である。ファドルッラーとその孫弟子世代の橋渡しとなったサイイド・イスハークが提唱する「神の時代」を分析することは、「ファドルッラーの神格化」という問題を理解する手掛かりになるだろう。

20世紀半ばのコプト正教会における聖メナス崇敬の復興

三代川 寛子（東京外国語大学）

本発表で取り上げる聖メナスは、4世紀に殉教したエジプト出身の聖人である。殉教後アレクサンドリアの近郊の砂漠に埋葬されたが、その墓周辺に湧く泉が治癒の奇跡を起こすとされ、多くの巡礼者を集めるようになった。7世紀にエジプトがイスラームの支配下に入ると巡礼路が閉ざされ、やがて聖メナスの巡礼都市は放棄され、聖遺物もカイロの聖メナス教会に移動された。以後も聖メナスはコプト正教会で崇敬されてきたが、数多く存在する聖人の一人であり、現在ほど人気や知名度のある聖人ではなかった。

後にコプト正教会の総主教キリルス6世となるアーズィル・アッター（1902–1971年、修道士としての名はミーナー）は、聖メナス崇敬を習慣とする家に生まれたことから、総主教に選出される前から個人的に聖メナス崇敬を広める努力を重ねていた。一方、第二次世界大戦中の1942年、上述の聖メナスの巡礼都市の遺構（1905年発掘）からほど近くのエルアラメインで戦闘が行われ、連合軍側で戦ったギリシア人兵士たちは、戦闘の最中に聖メナスが現れ連合軍を勝利に導く奇跡が起きたと主張し、アレクサンドリアのギリシア正教会が主導して聖メナスの巡礼都市の遺構に記念として教会を建てようとする動きが起きた。これに対してミーナー司祭（後のキリルス6世）は、アレクサンドリアのコプトの若者たちに聖メナス崇敬の復興を勧め、それを受けて後に聖メナス・コプト学協会が設立された。この協会は、聖メナスに捧げる教会の祭壇に聖メナスの遺跡の柱を使用するなど、聖メナス崇敬の復興に向けて活発な活動を行った。同協会は多くの出版物を刊行しており、そこでは聖メナスがエジプト出身のエジプトの聖人であることが強調される。1959年にミーナー司祭がキリルス6世として総主教の座に就くと、キリルス6世は聖メナスの巡礼都市遺構のすぐ隣の土地に聖メナス修道院を建設し、以後コプト社会全体で聖メナスの崇敬が盛んになった。

20世紀前半頃のエジプトのギリシア系住民は、綿花貿易に従事する者が多かったことが知られており、コプト正教徒とは政治経済的利益を異にする集団で、同じキリスト教徒であっても両者の間の交流は活発ではなかったとされている。そのため、第二次大戦中の聖メナス顕現はコプト正教徒の間では広く知られている出来事ではなく、顕現を契機にギリシア系住民から聖メナスを取り戻そうとしたのはミーナー司祭とその周辺に限られるようである。しかし、それ以外の要因として、聖メナスの巡礼都市遺構の発掘（1905年）およびその後の考古学的調査の進展によって、コプトの間でキリスト教時代のエジプト史に関心が高まったこと、そして1952年革命前後のエジプト社会全体の政治的・経済的脱植民地化などが、エジプト出身の聖メナスに対する崇敬の復興を促進したものと思われる。

アル・ビールニーの伝えるインドの太陽崇拝

永井 悠斗（筑波大学）

10-11世紀を代表する学者アル・ビールニーの『インド誌』は当時のインドの習俗・文化に関する重要な資料としてよく知られる。本発表では、この『インド誌』中の太陽崇拝に関する記述を手がかりに、ムルターン市の太陽崇拝と「マガ」の結びつきについて論じる。

マガとはサンスクリット語文献に現れる太陽崇拝者で、複数のプラーナ文献において太陽崇拝を専門とするバラモンとして言及される。しかし、そこでマガのものとされる風習の中には、アヴィヤンガという腰紐を身に付ける等、通常のバラモンの間には見られない風習が見出され、またそれらがむしろ古代イラン宗教における風習とよく類似することが指摘される。そのためマガはインド土着の集団ではなく、インドへと移住した古代イランの宗教者を起源に持つと考えられる。

プラーナ文献はまたマガについてある種の移住伝説も伝えており、それによれば、マガはクリシュナの息子サーンバによってシャーカ大陸と呼ばれる地からインド（ジャンプー大陸）の太陽寺院に連れて来られたとされる。マガが最初に招来されたという太陽寺院が存在した場所については、「サーンバプラ」や「ムーラスターナ」といった地名が見え、先行研究はこれをしばしば今日のムルターン市に比定している。

一方、『インド誌』にはマガに関連して、インドにおいてマジュース（マジ教徒）がマガと呼ばれるとの記述（第1章）、太陽神の像はマガによって安置させられるべきとするヴァラーハミヒラの『ブリハット・サンヒター』からの引用（第11章）、そしてゴーマーダ大陸にマガ、マーガダ、マーナサ、マンダガという四つの種姓が存在するとするプラーナ文献を情報源とした記述（第24章）が見出される。また、ムルターン市の太陽崇拝については、その繁栄の様子とその寺院の太陽神像の見た目に関する記述（第11章）、サーンバプラやムーラスターナというムルターン市の名称の変遷に関する記述（第29章）、ムルターン市における太陽神の祭りの存在の記述（第76章）等が確認される。

ここでビールニーが典拠としているプラーナ文献や『ブリハット・サンヒター』は今日のマガ研究における一次資料でもあり、このことから彼が今日のマガ研究者と同等の知識を有していたことが分かる。

そして、その上で興味を惹くのは、ビールニーがムルターン市の太陽崇拝を直接マガと結び付けてはいない点である。本発表は、この事実をプラーナ文献が語るムルターン市とマガの結びつきが単なる神話上の創作であることを示唆するものと考え、その解釈の妥当性を検討する。

スフラワルディー哲学における強度について

宮島 舜（東京大学）

本発表ではスフラワルディー哲学において用いられる強度の概念について範疇論の視角からさぐることを目的とする。

スフラワルディーの思想についてはこれまで神秘主義的ないし「神智学」的な側面が過度に強調される嫌いがあり、そのためにかれの理論哲学的な側面の研究についてはその進展が遅れている。Ziaiらの登場以降は、その論理学説や自然学説をも含めた、「哲学者」としてのスフラワルディーの思想研究がすすめられ、これまでの偏頗はただされつつあるが、それでもいまだスフラワルディーの哲学体系の理論的な側面が残りなく明らかになっているとは言い難いのが現状である。本発表では、範疇論を含む、これまで留目されることの少なかったスフラワルディーの理論哲学的な記述を、『照明哲学』以外の主要哲学著作群（いわゆる逍遙学派的著作群）をも併照しながら検討することで、その哲学の理論構造の一斑を及びあがらせるとともに、それが、スフラワルディーの思想としてよく知られる「光の形而上学」においても通底し、その礎石となっていることを明らかとする。

具体的な論点は次の二点である。ひとつは実体範疇における強度の問題、いまひとつは『照明哲学』の形而上学における強度概念の適用である。

前者については、アリストテレスの『範疇論』において提示され、そののちアラビア語圏の逍遙学派哲学者たちの実体論にも継受された、実体範疇は強弱を受け容れないとの立場を確認したうえで、逍遙学派批判者であるスフラワルディーがそれにたいしていかなる立場をとったかを、イブン・カンムーナやクトブディーン・シーラージーら註釈者たちの言をも参照しつつ、見定める。後者については、逍遙学派のものとは大きく手法をかえ、範疇論がそれ自体として論ぜられることのない著作『照明哲学』に、しかしいわゆる逍遙学派的著作において実体論にそくして行なわれた強度にかんする議論が反映されていることを示すとともに、スフラワルディーがそうした強度の概念ないし思考法に依頼することで自身の形而上学を展開している事実をあかす。

本発表をつうじてスフラワルディーのものとして知られる光に根ざす哲学がややもすれば神秘主義的にもみえるその外形に反して理論的な基礎のうえに打ち樹てられていることを証する一事例が提示されることになるが、これは、いまだ不明な点の多い逍遙学派的著作と『照明哲学』とのあいだの連関について考えるうでの一知見ともなりえよう。

オリエント文明の高校世界史における今後について—次期学習指導要領とその変化—

南澤 武蔵（東京大学教育学部附属中等教育学校）

2022年度より高等学校の学習指導要領が年次進行で実施されていく。今回の改訂において、高校地理歴史の世界史科目は従来までの世界史A（必修）と世界史Bが廃止され、新設の歴史総合（必修）と世界史探究となる。その結果、これまで全ての高校生が世界史Aで学んできた「高校世界史」は学ばれなくなる。新たな必修科目である歴史総合は、世界史と日本史の近現代史を扱い、歴史的なものの見方や考え方を学ぶ科目とされている。世界史Aは近現代史を中心としつつも、学習指導要領の解説には古代オリエント（オリエント文明）に関する言及があり、教科書にはメソポタミア文明やエジプト文明が掲載されていた。しかし、歴史総合には、学習指導要領等での古代オリエントに関する言及がない。

それでは、従来の世界史Bに替わる世界史科目である世界史探究はどうか。新設の世界史探究は単位数が3単位と従来の4単位よりも1単位減となっている。さらに、世界史探究も、その目的は歴史的なものの見方・考え方の育成が掲げられており、具体的・個別的な歴史を教え込むよりも、歴史系用語を精選し、概念などを表す言葉を中心に扱っていくべきだとされている。新たな世界史用語の試案では、従来は用語集に必ず記されていた「ジグurat（聖塔）」「アマルナ美術」「海の民」等が教えるべき用語から外されている¹。

大学センター試験の受験者数は現行の世界史Bは日本史Bの受験者数の6割にも満たない（令和2年度）。世界史探究になっても選択者の割合は大きく変わらないと推測される。世界史Aが廃止されることで、今後は半数以上の高校生がメソポタミア文明やエジプト文明が記載された教科書を持たなくなり、中学で学んだ古代オリエントがすべてとなる。

こうした点をまとめると、オリエント文明に高校で触れる機会は今後さらに減少すると指摘できる。そのため、中高生のオリエント文明に対する興味・関心を高めるには学校外での機会が益々重要となる。しかし、高校の授業でオリエント文明を扱うことが出来ないわけではない。歴史総合には様々な資料を使って歴史を考えさせる項目があり、この項目には古代オリエントの研究から提供される資料が授業教材になると考える。また、今回の改訂を受け、現在、現場の教員は主体的・対話的で深い学びを実現するために有用な資料を探し求めている。古代オリエントの研究成果から教材として活用できる資料や情報が発信されれば、オリエント文明の授業が展開される機会は増える。本発表では、中等教育における実践例も紹介しつつ、今後の高校世界史におけるオリエント文明の可能性を検討する。

註1 高大連携歴史研究会「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）」（https://kodairekikyo.org/wp-content/uploads/2020/08/selection_plan_2017.pdf）

近世イランにおける講釈とその周辺—『ハムザ物語』を中心に—

近藤 信彰（アジア・アフリカ言語文化研究所）

qesse-khānī, naqqālī, dāstāngū などと呼ばれた講釈はオスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝など近世の社会で非常に流行したことが知られている。昨年、Pasha M. Khan によるインドにおける講釈についての研究書 (*The Broken Spell*) が刊行されたが、同じペルシア語文化圏でもイランのそれについては、歴史学的研究は少ない。また、文学研究においては、ペルシア語でそれなりの蓄積があるが、資料の検討が網羅的ではない。本報告では、近世イラン（16～19 世紀）の講釈のあり方とその時期による変化を、網羅的な史料の検討により、明らかにしたい。

講釈のなかで特に人気があったのは、預言者の叔父ハムザ（625 年没）を主人公とする『ハムザ物語』であった。ペルシア語版が起源とされ、オスマン朝やムガル朝、中央アジアやさらに東南アジアまで広がったこの物語は、前近代においてムスリムたちに最も親しまれた作品と言われている。しかし、本家とも目されるイランにおけるあり方については、フェルドウシーの『王書』に比して、注目されることは少ない。また、16 世紀以降のシーア派化にともなって、カルバラーにおけるイマーム・フサインの殉教に関わる殉教語りのようなシーア派に関連する語り物の方が注目を集めてきた。しかし、『フトツワの書』に見られるように、講釈はイスラーム神秘主義とも深いかわりがあり、民衆文化の中に根を下ろしていた。サファヴィー朝のエスマーイール 1 世（在位 1501～24）は息子達の名前に『ハムザ物語』の登場人物のそれをつけるなど、耽溺していた。サファヴィー朝時代に講釈 (qesse-khānī) と言えば、まず、『ハムザ物語』の講釈を指し、王書詠み (shāhnāme-khānī) に劣らない人気を持っていて、イスファハーンの珈琲店で演じられたのである。

シーア派ウラマーの批判もあり、18 世紀以降、講釈は少しずつ周縁化していくが、それでも『ハムザ物語』は講釈の人気演目として、20 世紀初頭まで生き延びた。大きな変化が生じたのはレザー・シャー期（1926～41）であり、彼の命により、『王書』以外の講釈が珈琲店で禁止されたことによる。『王書』が現代のイランで国民的叙事詩となり、『ハムザ物語』が忘却されていった背景には、イラン・ナショナリズムの影響を見ることができる。

イラン近代史の叙述における時代区分の問題

鈴木 均（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

イランの歴史は世界史上最古の帝国であるアケメネス朝を起点とするとしても、西欧の歴史的な時代区分を基準とすることがあまりに困難であることからこれまで正面から検討されることが少なかった。だが西欧近代の圧倒的な影響を近代史の重要な契機として考える場合、例えばイランの近代史の起点をどこに置くべきかは極めて重要な問題であり、またそこから改めてイラン史全体の時代区分の問題について新たな省察を加えることも可能であろう。

本報告を行うことを思い立ったのは Abbas Amanat の浩瀚なイラン近現代史の通史 *Iran: A Modern History* (Yale Univ. Press, 2017) に触発されたことであるが、「近代史」と題しつつサファヴィー朝から革命後の現在までを一貫した視点の元に叙述する本書の歴史観は、19世紀末以来の立憲主義の導入から20世紀初頭の立憲革命までを近代史の劈頭に位置づける従来のイラン近代史理解に深刻な再考を迫るものであろう。本報告は以上の問題意識から、イラン内外で流通している教科書や歴史概説書、欧米でのイラン史関係の出版物などをも参照しつつ若干の考察を試みる。

なお本報告は必ずしも文献的な資料の精査・渉獵によって歴史学上の学術的な知見を付け加えようとするものではなく、むしろイラン近現代史の叙述についての基本的な問題意識から発して近代以前の時代区分の問題、イランにおける国民国家の問題、イラン現代史の起点をめぐる問題などについて学界の内外に広く議論を提起することを意図している。

レザー・シャー成立期のイランにおける選挙制度改革と国民国家理念
—1304/1925年選挙法改正—

徳永 佳晃（東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程）

20世紀前半のイラン立憲制研究において、国民議会の選挙制度改革は、国民による政治参加の理念及びその実態を考察する上で欠かすことができない論点である。なかでも、立憲革命(1905—1911)後期に制定された1329年選挙法(1911)は、直接選挙に基づく男子普通選挙を規定した点で、議会制民主主義の観点から高く評価されてきた。その反面、同選挙法においては女性の参政権がないなど政治的マイノリティの権利保障が十分ではなく、加えて選挙の実態として地主層による小作人の選挙への動員が見られたことも先行研究で指摘されている。さらに1920年代、レザー・シャーによる組織的な選挙介入が強まっていくなか、国民議会選挙は、議会制民主主義におけるその意義を失っていったとされる。しかしながら、これらの先行研究においては、当時の国民議会がこの選挙制度の問題点をどのように認識し、いかなる理念を掲げてそれを改善しようとしたか、並びにその制度改革が選挙に与えた影響とは何か、十分に論じられていない。

以上を考察するにあたり、本発表は、第5期国民議会(1924—1926)で審議され、同会期末に立て続けて制定された3つの選挙に関する法律を取り上げる。本発表において1304年選挙法改正(1925)と総称されるこれらの法律は、1329年選挙法(1911)制定後初めての選挙法改正であった。この選挙法改正の国民議会における審議、並びにその理論的及び政治的背景を分析することによって、当時の選挙制度改革の全体像が明らかになるであろう。

本発表は、「はじめに」「おわりに」を除き、以下で述べる3節から構成される。まず第1節では、選挙法改正にいたる背景が考察される。具体的には、1329年選挙法(1911)で規定された議席数が憲法典の規定に抵触していたこと、さらに選挙の実施にあたって地方政府及び知事の選挙への介入などが問題視されていたことが述べられる。これらを前提として、第2節では国民議会における審議、特に選挙区割りに関する議論が取り上げられる。ここでは、均質的な国民理念及び有権者の判断能力という観点から、政治的マイノリティの権利改善が図られず、同時に都市部、特に首都テヘランの例外的な地位が容認されたことが示される。その結果、1304年選挙法改正(1925)は、専ら地方選挙区における選挙の改善を目指すものとなった。この点について第3節では、知事及び地方有力者の権力濫用を防ぐため、投票方式及び選挙管理委員の選考方法などが変更されたことが論じられる。これらの措置に加えて、中央政府による選挙の監督権限が明記されたことは、レザー・シャーによる全国的かつ組織的な選挙介入を結果的に助長することとなった。

20世紀初頭オスマン帝国における「3月31日事件」発生の一要因としての徴兵問題

矢本 彩 (明治大学・大学院)

20世紀初頭オスマン帝国（1300頃–1922）で発生した「3月31日事件（31 Mart Olayı）」（1909）は、しばしば青年トルコ人革命（1908）に対する「反革命」や「イスラーム主義」運動などと評価されてきた。しかしながら軍人、政治家、宗教関係者、外国人などさまざまな立場の人びとが事件に関わっていたため、事件の原因やその本質が多様な捉え方をされてきた。つまり「反革命」や「イスラーム主義」という評価も「3月31日事件」の一側面をとらえたにすぎない。

先行研究では、事件の主要な原因の一つとして「叩き上げ将校（Alaylı Subay）」と「士官学校出身将校（Mektepli Subay）」の間に生じた衝突や軍内部の再編に伴う対立が挙げられた。またかつてマドラサ学生（Talebe-i Ulum）に課されていた徴兵免除試験が復活することに対する不満を理由に学生が事件へ参加したことが指摘されてきた。ただしマドラサ学生の実際の言動には注意が払われてこず、特に地域による差異や個々のマドラサの事情というものが考慮されてこなかった。

報告者はこれまで、「3月31日事件」で首謀者といわれたデルヴィーシュ・ヴァフデティ（Derviş Vahdeti）が刊行した『火山 *Volkan*』紙を元に同紙の立場やヴァフデティの言動について明らかにしてきた。そして事件の裁判記録などを元に処罰された人びとの多数（35%）が軍人であったこと、一方で宗教関係者は8.5%にとどまったことを指摘した。

本報告では、事件での重要性が指摘されながらも多くの場合処罰の対象にならなかったマドラサ学生がいかなる動機で「3月31日事件」へ関わり、行動したのかを明らかにするべく、徴兵免除試験再開に伴う学生の動向を検証する。主な史料は大統領府オスマン文書館所蔵のオスマン語文書、『法令集（*Düstür*）』集録の「徴兵法令」、帝国下院議会の議事録、そして同時代の新聞などである。イスタンブルではなく、地方でおこなわれた徴兵免除試験の記録や新聞における学生の言動などを分析し、「3月31日事件」発生の原因や事件の本質を明らかにする一助とする。

ÖZCAN, Azmi. “Otuzbir Mart Vak‘ası,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, 34, 2007, s. 9–11.
ZÜRCHER, Erik Jan. “The Ottoman Conscription System, 1844–1914”, *International Review of Social History*, 43- 3, 1998, pp. 437–449.

イスラーム的制度としてのワクフとその法学的構築
—クルアーン・ハディースとイジュティハード—

KHASHAN AMMAR (立命館大学)

預言者ムハンマド時代末期に起源を持つワクフ（寄進財産）は、後の時代に大きく発展し、マスジド（モスク）の建設や維持・管理など宗教的事業の分野に限らず、教育や学問、医療、はては動物愛護まで、イスラーム社会の福祉のために幅広く活用されてきた。イスラーム的な福祉制度として、ワクフはザカート（喜捨）に劣らぬ重要性を持っていると言える。

では、それはどのような典拠に基づいているのであろうか。それを探究すると、クルアーンにおいて、喜捨を意味するザカートとサダカの語（および同語根からの派生語）が登場する箇所それぞれ30、12を数え、インファーク（有意な支出）も28カ所で見られるのに対して、ワクフの語は一切登場しないことが判明する。法学者によってワクフの典拠とされている章句はすべて、寄付としてのインファークが推奨されている箇所である。

次に、イスラーム法の第2の典拠であるハディースの場合は、どうであろうか。なお、クルアーンの場合に「章句を数える」ことが容易であるのに対して、ハディースは総数が決まっていないため、典拠となっているハディースを数えることの方法論的な問題がある。それについても本発表で詳論したい。その手続きをした上でハディース集を調べると、ここでもワクフは、ザカートと比べると圧倒的に少ないことがわかる。

2大真正集とされるブハーリーとムスリムの『真正集』を検証すると、まず、ワクフが単独のジャンルとなっていないことがわかる。ザカートの書（ハディース集で「書」は主題別の区分）が独立しているのに対して、ワクフに関するハディースは、ザカートの書、遺言の書、贈与の書などにあちこちに散在する。ブハーリー真正集では、ワクフに関するハディースは25ほど、ムスリム真正集では15を超えない程度で、典拠となるハディースは数が少ない。ザカートについては、それぞれ108、179ものハディースを数えることができる。

このように、イスラーム的な福祉制度としてワクフとザカートを比べると、ワクフのほうは賦課的法規定（フクム・タクリフィー）としてもイスラーム的な適法性などについても、明文の典拠が少ないことが判然とする。実際にそのため、イスラーム法学の形成期からワクフをめぐるさまざまな議論がなされてきた。ヌズム論（イスラーム的制度論）の視点から見ると、ワクフ制度の法学的な構成はクルアーンとハディースの明示的なテキストよりも、イジュティハード（法解釈）に基づいていることが判然とする。

本発表では、ワクフというイスラーム的な福祉制度がどのように法学的に構築されているかについて、ザカートと比較しながら、考察をおこなう。

マムルーク朝後期カイロにおける都市と災害

三橋 咲歩（早稲田大学）

マムルーク朝期（1250-1517）エジプトは、気候の寒冷化の影響を受け、ナイルの流量変化やそれに伴う水害・旱魃といった自然災害の脅威に晒されていた。中でも、水利社会である同地において重要視されたのは、季節によるナイルの水位変動であった。近代以前の国家は、この水位変化を利用した灌漑農業を経済基盤としていたが、ナイルは時に洪水や渇水をもたらし、その影響は食糧生産・流通、都市における市民生活に波及した。それゆえ、ナイルのもたらす様々な現象や問題をいかに管理・対応していくかは、当時のエジプト社会にとって最重要課題のひとつであった。

本報告では、マムルーク朝の首都カイロとナイルに注目し、主に15世紀に発生した渇水・旱魃と、それに付随する飢饉や疫病といった都市部における諸問題を災害史の観点から捉え直す。そして、(1) 当時の人々がどのようにして災害に対応し、克服してきたのか、(2) 災害やそれに付随する問題の原因・影響をどのように理解し、それに関する知識や経験をどのように共有していたのかの2点を明らかにすることを目指す。史料としては主に同時期の年代記を用い、「旱魃・飢饉」(qaḥṭ)「灌漑用水の不足・旱魃」(sharāqī)といった自然災害や、それによって引き起こされる「騰貴」(ghalā')などの現象を表す史料上の用語に基づいて分析を行う。

ナイルがもたらす諸災害は、短期間のうちに繰り返し発生したことから、ある程度の発生の予測が可能であったことがその特徴として挙げられる。このような災害の「身近さ」は、社会の中で災害の経験を蓄積・共有することを容易にし、人々の危機認識の変化にも繋がったと考えられる。また、これは都市の人々が危機的状況下において災害に「対応」するだけでなく、その状況を逆手にとって「利用」することも可能にした。災害に対する公的な救済制度が整っていなかった前近代社会においては、こうした知識・経験の蓄積と共有が災害を乗り越える重要な役割を担っていたといえる。

19・20世紀転換期のアフガン人による武器交易の再検討

小澤 一郎（東洋文庫）

本報告では、19・20世紀転換期に英領インド・アフガニスタン・イランの境界地域（以下、西・南アジア境界域とする）を舞台として活発化したアフガン人（パシュトゥーン人）の武装交易集団による武器交易の再検討を試みる。当時、英領インドをはじめとする周辺諸国家にとって治安上の脅威とみなされたこの交易活動は、これまでもつぱら英領インド政府の治安政策や边境支配の観点から研究されてきたため、彼らの交易活動の存立の背景や歴史的意義はほとんど検討されていない。しかしこの武器交易は、歴史上交易民としても知られてきたアフガン人の活動の延長線上に展開したものであり、またその活動範囲が西・南アジア境界域の陸上のみならずペルシア湾を越えて対岸のマスカトまで広がるなど、この地域の交易や諸人間集団間の交流の歴史を検討するうえで興味深い題材となりうる。

このような問題意識から、本報告では主に英領インド側の史料を用いながら、19・20世紀転換期のアフガン人による武器交易活動の全体像を再構成し、そのうえで以下のような観点から彼らの活動の性格と歴史的意義を検討する：①アフガン人の武器交易がこの時期に盛行した背景（ペルシア湾武器交易の展開、英領インドの治安政策、アフガン人内部の武器需要）；②交易の参加したアフガン人の出自とその活動にみられる特色（交易集団として行動パターン、武装と暴力性）；③交易活動の具体的なあり方とその意味（交易活動の季節性とアフガン人の季節移動との関連、交易ネットワークの形成・展開とその背景、武器とともに交易される品々）；④アフガン人の活動の海を越えた広がり（アフガン人の海への進出を可能にした諸条件、マスカトにおけるアフガン人の活動）；⑤アフガン人と他の諸集団（英領インドのムスリム・ヒンドゥー商人、イラン商人、バルーチ）との関係。

このような検討結果を近世・近代のユーラシア大陸・インド洋海域世界に関する歴史研究や人類学の成果と突き合わせることによって、19・20世紀転換期におけるアフガン人の武器交易活動を近世から近代にかけての西・南アジア境界域の歴史的文脈の中に位置づけることを試みる。また、陸上のみならず海を越えて広がった彼らの交易活動を検討することにより、海域史研究において近年課題とされている、陸域と海域の二項対立的理解の解消という問題にも一つの示唆を与えることが可能となろう。

マディーナット・アッ=ザフラー王宮址の柱頭のプロポーションについて

安岡 義文（早稲田大学）

本発表では、後ウマイヤ朝の王宮址マディーナット・アッ=ザフラー王宮址から出土している柱頭のプロポーションを分析し、スペイン・アンダルシア地方特有の美術様式の起源について考察する。これらの柱頭は、どれも10世紀に造られたもので、それまでの西洋古典古代で発案された柱頭様式を転用材として再利用する造営方法から脱却し、また、その後のムデハル様式、モサラブ様式へと変容を遂げるスペイン独自の建築・美術様式の源流となった独自様式を創り出した時代の作品といっても過言ではない。とはいえ、その外観は、西洋古典建築のコリント柱、あるいはコンポジット柱を踏襲しており、その設計方法も、同文明に依拠していた可能性がある。そこで、ウィトルーウィウスの柱の設計技法と比較して、共通点と相違点を見出すことで、今後、後ウマイヤ朝の建築・美術様式が、何を受容し何を捨象したのかを見極めるための一助としたい。